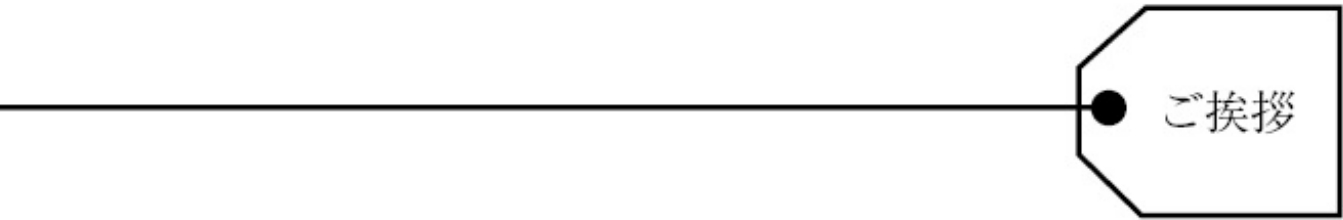


その祭りの 茶は





ご挨拶

めくるめくお茶創作ワールドへようこそ！

この電子書籍は、twitter 上で活動するお茶（日本茶・紅茶・中国茶など）を愛する創作好きの小説書き、絵描きが集まった企画「創作クラスタお茶部三期」のテーマ作品集です。

今回の作品集のテーマは『お茶×祭り』

参加部員それぞれの描くお茶と祭りの物語を読み切りの短編小説と漫画作品でアンソロジーとして纏めました。

部員以外の皆様にも楽しんでもらえたら嬉しいです。

創作クラスタお茶部三期

書名	冊数	著者名
平和の味	7	十宮はな
夏至祭の花嫁	16	天都しずる
羽化	31	南風野さきは
夏の宝物	46	Ag
彼女の軽蔑 彼の侮蔑	62	櫻いいよ
青藍に咲く	72	志水了
年に一度の出会い探し	88	伊佐雄
ロザリー	102	神奈崎アスカ
秘密の場所で、また会いましょう	119	椎乃みやこ
チャノハばらいの祭り	136	トダ姉
鼠の福音	142	綿子



レポートテーマは
「お茶と祭り」

下調べにお茶にまつわる専
門図書館へやってきた。

なんだかんだで結構入り
浸っている場所だ。

特徴はその専門蔵書と、
館内ではお茶ならば
飲むことが許されていると
いうこと！

茶 110~505

階

茶 510~810

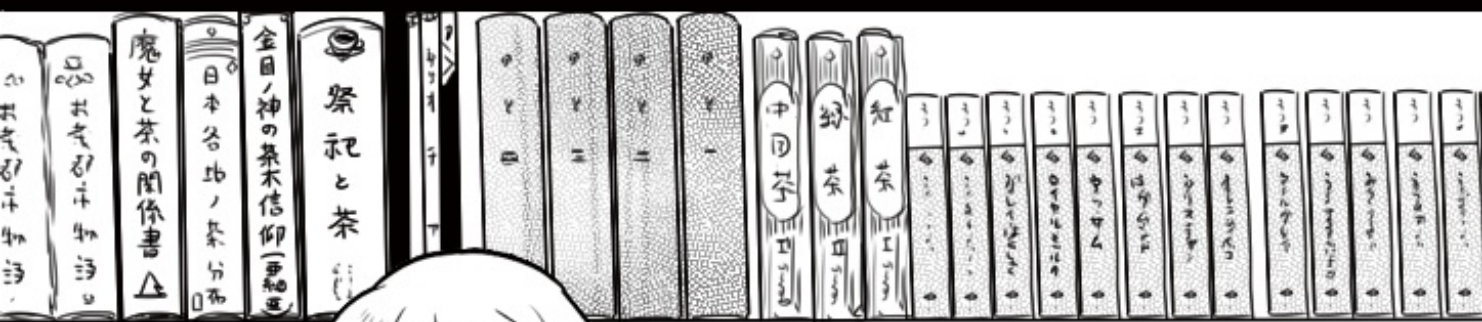
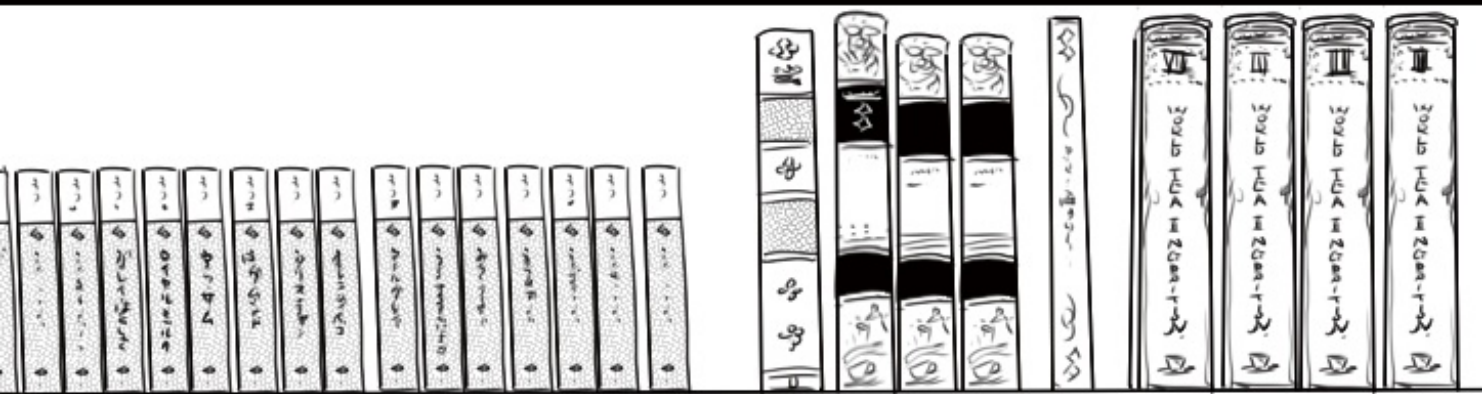
貸出票

No. 1

宮本 通	(済)
葉山 亮一	(済)
滝沢 龍也	(済)
田辺 淳子	(済)
東 定行	(済)
葉山 亮一	(済)

懐かしいことに
貸し出し票を使った貸し出し
をしている

これだけの蔵書を
アナログな方法で管理すると
は、やっぱり変な図書館だ





…全ての魔獣と
女王は倒され
魔獣の恐怖は消え去った

そして城下は祝いの祭りで
大喜びの大騒ぎだ

『ありがとう勇者よ
これで世界は救われた!!』



…しっかしさあ



なんてね



平和の味

十宮はな

別に活躍を祝って貰わなくてもいいんだけどなあ……

ハテだー

もー

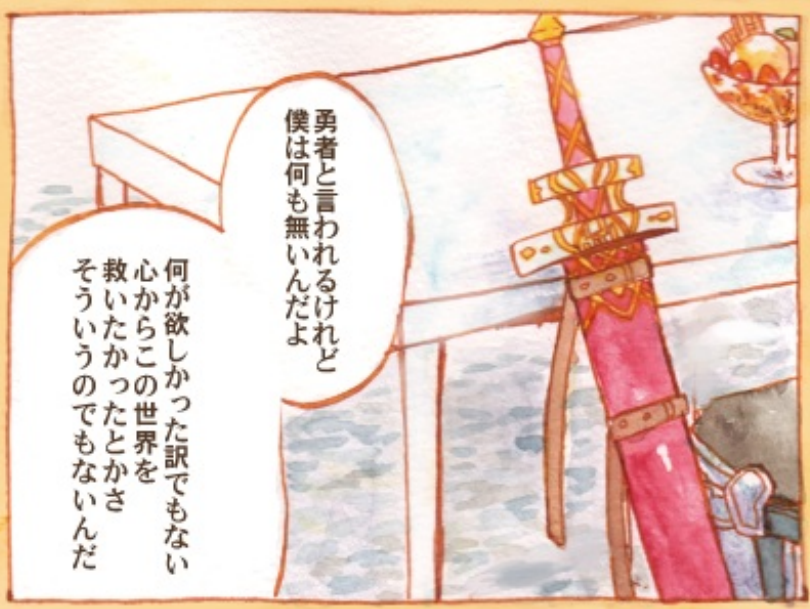
折角だから祝ってもらいなさいよ
頑張ったんでしょ
ユウシヤサマ?



……たしかにさ

勇者と言われるけれど
僕は何も無いんだよ

何が欲しかった訳でもない
心からこの世界を
救いたかったとかさ
そういうのでもないんだ



……最初はさあ
土地の神を殺してしまった

村のしきたりで
15になった子は祭りの日
聖剣を引き抜けるか
挑戦するんだ





神だと思っていたものが
魔獣だったそれだけさ

…真実を知ったのは
村から追い出されて
この国に来てから
なんだけれどね

聖剣に選ばれし者よ
それを罪だと言うのなら
この世を蝕む
百の魔獣を討ち払え

お前の罪の心も
軽くなろう

…僕は
許されなかったただけだ
あの日斬ってしまった事を

二十年かけて全ての魔獣と
堕ちた神獣も倒したけれど
本当にこれで良かったのかは
僕にはわからない



きつとねえ
獣が居なくなったら
次に争うのは人と人だ
陣取り合戦は終わらない

僕は本当に
世界を救ったのかなあ

貴方ねそんな事考えて
うじうじしてたの？
ユウシヤサマは
ずいぶんと根暗ね

うっわ言うねえ

ずっと見てきた私が言うわ
肝心な所で後ろ向きなの

いいから
黙ってこのお茶
飲みなさい

はい

好きだけどさ
お茶

いいから

はあ……

!!

…この味は

懐かしいでしょ？
遙か遠くはアルティリア
エミエの村の翠のお茶

今までずうっと
幻と言われていたけれど…
すべての魔獣が消えたから
ようやく仕入れられたのよ？




誇っているのよ喜んでいいの
今この瞬間の平和は
貴方が勝ち取ったんだもの




遙かなるアルティリア

今は遠き故郷の村よ





今は遠く
記憶の果てに
光に満ちた茶の畑



あの日より前は
ほやけてしまつて
葉を摘む誰かの笑顔も霞む

皆で飲んだ茶の味すら
忘れる程に
彼の地は遠く



遙かなるアルティリア
懐かしい翠の雫

.....
っ



平和の味だ



……ありがとうね
これは確かに



でしょ？

いいかもしれないねえ
こういう日もさ

お、この前借りてから
結構他の人も
読んでるんだな

貸出票
平和の味 No. 3.

葉山 亮一	済
長谷川 優香	済
高橋 さゆ	済
終ののん	済
原 道彦	済
小谷 純隆	済



祭りには乙女がつきもので、異世界と現世をつなぐキーワードとして登場する物語も多い。

お茶に…祭りに…乙女これをレポートテーマにしたらどうだろう。

夏至祭のお茶は透き通る薬草の香り
乙女も目覚める薄荷の香り



夏至祭の花嫁

天都 しずる

雪解けとともに短い春を迎え、日が最も高くなる六月。ライラックやナナカマドの花が家々の窓際に飾られる週末に、ノル・スコグの夏至祭は開かれる。

夏の到来を祝い、ノル・スコグの森を守護する神イシエルデイを讃える夏至祭は土曜日の夕方に始まり、森の泉を囲んで日の境目がわからなくなるほどに飲み明かすのが慣例だ。

そして日曜日の早朝、イシエルデイの花嫁役に選ばれた少女が朝露と新鮮なハーブを摘み、ハーブティーを捧げるのだ。その神事を持って、祭りは終わりを迎える。

祭りには毎年近隣の村から多くの観光客が訪れ、彩りを添えていた。

泉の中央で、巨大な焚火が轟々と音を立てて周囲を明るく照らしている。人々はそれを光源に、各自親しい相手と話したり、恋人候補を探していた。夏至祭は若者にとって格好の出会いの場だ。

ニナは焚火から離れた場所で、若者達を眺めながら一人溜息をついていた。「ねえ、ニナ。そんなところで突っ立ってないで一緒に行きましょうよ」

顔を上げると、友人のマイラがにこやかに立っていた。夏至祭の衣装である白いブラウスに赤いベスト、黒のスカートを履いて、頭には花冠をつけている。

ニナは自分の腕をぐいぐい引っ張るマイラの手をやんわりと引き剥がした。

「私はいいから、マイラだけ行つてきなよ」

「駄目よ！　だって、放つておいたらニナはいつまでも一人じゃない」

よほど今日を楽しみにしていたのか、軽やかな声でそう言い、マイラがスカートを翻して手招きしてくる。ニナは、苦笑しながら首を横に振った。

「ごめんね、私はまだ十五歳だから男の人に声を掛けられないの」

「でも、明後日には十六歳じゃない。変わらないわ」

「夏至祭で男の人と親しくなれるのは十六歳からって決まりでしょう？　それに、明日の神事もあるし」

頬を膨らませるマイラに言い聞かせるよう、ゆつくりとそう話す。

ノル・スコークの夏至祭では、女性は十六歳になるまで家族以外の異性に声を掛けてはならないと決められていた。十六歳の誕生日を迎え、乙女と呼ばれるようになって初めて一人前になり、結婚適齢期を迎える。

ニナはまだ十五歳。服装こそマイラと同じものの、乙女の証である花冠はつけていない。代わりに、長い亜麻色の髪には小さな花が編み込まれていた。

ニナの説明に、マイラは納得いかない様子でワインを煽る。

「夏至祭の花嫁役なんてリタにやらせればよかったのよ」

「私がお父さんをお願いしたの。これが最後になるから、私にやらせてって」
葡萄ジュースに口をつけつつ、ニナはスプリンググリーンの瞳を細めた。

「……来年からは、もう花嫁役にはなれないのね」

「子どもの花嫁でないとイシエルデイ様が見えないからって話よね」

マイラはそう言うと、空になった自分のグラスを軽く覗きこんで嘆息した。

「ニナを誘うのは来年までお預けね。でも、来年には私結婚しちゃうかも」

「そうなるように祈っているわ」

いたずらっぽく笑うマイラに笑い返し、祭りの中心に戻っていく彼女を視線で見送る。

——大人になんて、ならなければいいのに。

ニナは夏至祭で花嫁役を務めることが密かな喜びだった。十年も続けてきた

ことだからというのものもあるが、他にも特別な事情があった。もったも、それを誰かに告げたことは一度もないのだが。

嘆息しつつ、料理に手を伸ばす。地面に敷いたシートには、葡萄ジュースやワインの入ったカップ、ニシンの酢漬け、茹でたじゃがいもやスモークサーモンが載せられた皿が置かれていた。いずれも、二人分ある。

ニシンの酢漬けを口に入れると、ほのかにマスタードの味がする。母親お手製のそれを味わっていると、ふと隣から気配を感じてニナは動きを止めた。

——来た。

胸中で眩き、息を詰める。

隣に視線を向けると、濡羽色の髪 of 青年がニナの隣に座り込むところだった。

青年はじつとこちらを見つめている。セルリアンブルーの瞳の奥では焚火の炎が燃えていた。

青年が夏至祭の夜にニナの隣にやって来たのは、今回が初めてではなかった。

初めて夏至祭の花嫁役を務めた六歳の頃から、彼は毎年ニナの隣に座って無言でワインと料理を楽しんでいる。その話を昔花嫁役を務めたことのある母に

話すと、次の年から料理を二人分用意してくれるようになった。

母には青年が誰かわかっているのだろう。そして、自分にも。

ニナは目礼し、ワインの入ったカップを無言で差し出した。それから、料理が盛られた皿を青年が取れるように横にずらす。

青年は、無言でワインを口にした。ここに至るまで、お互いに一言も発していない。ニナは彼の声を聞いたことがなかった。

端正な横顔をちらりと見てみる。彼もニナと同じタイミングでこちらを見つめ、目を細めた。優しく微笑まれ、頬が紅潮する。ニナは次第に速くなる心臓の音を相手に聞かれないか心配しながら、ぎこちなく笑い返した。

二人はしばらく見つめ合った後、どちらからともなく夜空を見上げる。木々の間から見える空には、薄い緑色のカーテンがかかっていた。

二人は無言でオーロラを見上げる。ニナは青年の声を聞いてみたいと切望していたものの、結局今年も叶わなかった。

宴を楽しんだ人々が遅い就寝時間を迎えた早朝に、ニナは目を覚ました。

昨日と同じ衣装に着替え、丹念に髪を梳かして小さな薔薇の花を編みこんでいく。茎から棘を抜かれた薔薇の花は甘い香りを放ち、ニナの髪を飾った。

支度を済ませ、両親に声を掛けてからノル・スコグの森に向かう。しんと静まり返った村には、濃い草の匂いが立ち込めていた。夏の朝特有の匂いを胸いっぱい吸い込み、朝露が下りる前に森からミントを摘んでいく。

手に持った籠にミントを入れ、今度は小さな木樽を手にしている間に、大粒の朝露が植物の葉を濡らしていく。霧が立ち込める中、ニナは確かな足取りで朝露を採取していった。朝露採りも十回目となると、随分手慣れたものだ。

泉の周りを巡り、朝露を採取し終えたニナは泉のほとりで焚木を始める。火は、泉の傍で焚木の番をしていた村人に声を掛け、その火を貰った。

ガラスポットに軽く揉んだミントを入れ、少量だけ沸かした湯を注いでいく。蓋をして蒸らし、ニナはガラスポットを手に、森の奥へと向かう。

森の奥にはすでに両親が待っていた。ニナはポットを母に預けてからカップを両手でしっかりと持つ。泉の水で濡らされたそれが夏の空気で乾くまで、花嫁はイシエルデイのために踊り続けるのだ。

一つ息を吐き、片足でつま先立ちになりくると回る。カップが乾きやすいよう、両手を伸ばして風をたつぷりと浴びさせながらニナは踊った。軽やかな舞は、夏そのものを表している。ニナも初めて花嫁役になると決まった時、繰り返し練習したものだ。次の花嫁役であるリタもそうだろう。

これがイシエルデイに捧げる最後の踊り。
踊りに没頭していると、こちらを注視する視線が増えていく。

——イシエルデイ様。

視界の先には昨日の青年が立っていた。彼は微笑を浮かべ、ニナを見つめている。その瞳の奥にある鋭さに、ニナは一瞬にして緊張に体を強ばらせた。

決して間違いは許されないという思いで、ニナは一分の隙もない踊りをイシエルデイに捧げる。

やがてカップが乾くのを目視し、ニナは一度ターンをして踊りを終える。

母が差し出すポットを受け取り、ミントティーをカップの中に注ぎ入れた。

それを、零さないように持って歩き、両膝をついてイシエルデイに差し出す。

花嫁役とは名ばかりで、神に捧げられる下僕しもべのようなものだ。同じ目線など許

されない。

しばらく待っていると、ニナの手からカップの重みが消える。顔を上げると、イシエルデイがカップを傾け、満足そうに息を吐き出したのが見えた。

これで、夏至祭は終わりだ。

脱力しそうになりながら、カップが手に戻されるのを待つ。すると、いつもなら空っぽになって返ってくるカップが、なぜか重い。

セルリアンブルーの瞳がこちらを見つめている。その目が、中身を飲んでもいいと許しているようだった。

ニナは躊躇した後、最後の思い出にと誘われるようにミントティーを口にす。爽やかな味が口いっぱいに広がった瞬間、母親の悲鳴が響き渡り、ニナはびくりと肩を竦ませた。刹那、正面から男の声が聞こえてくる。

「ニナ」

鼓膜よりも心そのものに響くイシエルデイの声は、彼が向けてくれる笑顔そのままに優しく慈愛に満ちている。

放たれる言葉だけが、無慈悲だった。

「これでお前は、私と同じものになった。乙女になったその時、真に私の花嫁になるために。私の声が伝わるのがその証拠だ」

両親がニナの名を叫び、辺りを探し回っている。

——どうして、誰も私のことが見えないの？

目の前にいるのに、両親にはニナの姿が見えていなかった。あのミントティーを口にした瞬間、ニナが人ではないものに変化したかのように。

「昔、怪我をした兎がいたのを覚えているか。右前足を木の枝で傷つけ、血を流していた兎を」

ニナの動揺を遮るように、イシエルデイが言葉を続ける。

彼の問いに、ニナは数度頷いた。六歳の夏至祭の日、兎を助けたことは今でも忘れていない。

朝露を採取している最中、怪我をした兎を助け、その手を血で汚してしまっただのだ。

泉の水で洗い清めたものの、血の匂いは完全に消えてはいない。おまけに、姿を見せたイシエルデイにそれを自己申告してしまった。

「神事を前に、それでもお前は怪我をした兎を救った。その優しさが、誤魔化さずに素直に私に詫びた心の清さを、ずっと愛していた」

両の手がこちらに伸ばされ、背中に回された。

「ニナ、私の花嫁。どうか声を聞かせておくれ。初めて出会った日のように」抱き寄せられたのだと気付いたのは、彼の声が聞こえて数秒の後だった。イシエルデイの懇願に、ニナは吐息を震わせながらどうにか言葉を紡ぐ。

「イシエルデイ、様……」

あくまで懇願であるのに、逆らうことは許されないと心の中で誰かが告げる。

ニナは彼の言葉に従うようにつたなく彼の名を呼んだ。

イシエルデイは満足したらしい。背中に触れる腕に、力が込められる。

「森の長と、賭けをしていた。お前がああのミントティーを飲まなかったら私の勝ち、飲めば森の長の勝ちと。同じ物に口をつければ、強引に同じ存在にすることが出来る。私は、お前を騙すような手で人の輪から離したくなかった」

「私のせいで、イシエルデイ様は賭けに負けてしまわれたのですか……？」

心配そうに問うニナの額に、イシエルデイの唇が啄むように触れる。

「ああ。だが、それでよかった。お前と語らえることが、これだけの喜びを与えてくれたのだから」

森のあちらこちらで、木々や植物が蕾を付け花開き始めている。季節外れの花が咲く光景に、これがイシエルデイの力によるものだと理解した。

花々が咲き乱れる光景は、さながら楽園のようだ。ニナは無意識にイシエルデイの腕に縋りつく。

「乙女になるまでは、たとえ私と同じ物に口をつけたとて効力は弱い。じきに戻るだろう。もう一度私と朝露で淹れたハーブティーを飲んだ時、ようやくお前は真に私の花嫁になる」

腕に、きつく力が込められる。ニナが明日この森を訪れるかわからないと考えているせいかもしれない。ニナは自分の思いを誰にも、イシエルデイにさえ告げていないのだから。

もし明日ミントティーを飲まなかったら、イシエルデイは二度とニナを花嫁に望まないだろう。そしてニナも彼の姿を見られなまま大人になっていく。どうするべきなのか。ニナは自分を探して名を呼び続ける両親をしばらく見

つめた後、覚悟を決めるように告げた。

「……恋をしていたんです。長い間、ずっと」

まるで罪を告白するような声は、果たして誰への罪悪感なのかニナにもわからなかった。

「恐れ多い気持ちだと、ずっと想いを抑えこんできました。けれど、結局抑えることなんてできなかつた」

ニナは夏至祭にしか会うことのできない、言葉すら交わしたことのない彼のことを心から愛していた。いつか来る少女時代の終わりが、この上もなく恐ろしくなるほどに。

「あなたと、お話がしてみたかったです。イシエルデイ様。あなたの御声を聞いて、語らいたかつた」

母親が、ニナを見つける。

もう人の身に戻っているのだろう。イシエルデイの腕から力が抜けていく。

その腕に触れ、最後の思いを紡いだ。

「どうかもう一度私を花嫁と呼んでください。明日の朝、私が乙女になったそ

の時に」

——翌日、ノル・スコークから夏至祭の花嫁が忽然と姿を消した。

残されたのは、森の中に落ちていたティーカップが一つだけ。

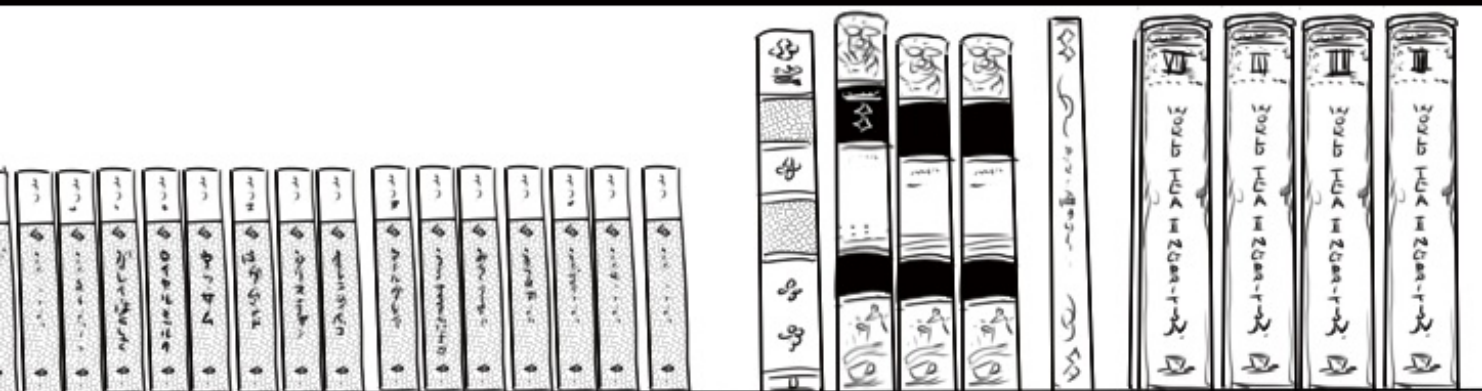
村人により裏返されたティーカップから、ミントティーが一滴落ちる。短い草を伝ったそれは、森に溶け込むように土に吸い込まれていった。

返却完了って
あれ、この名前
前に借りた本にも
あったような…

貸出票

薬草茶伝承Ⅲ
夏至祭の花嫁 No. 1.

荻野 美海	済
丹羽 勇	済
葉山 亮一	済
原 道彦	済
浜崎 道正	済
柊ののん	済
葉山 亮一	済



フィールドワークへ向かった時
かの東の地では、侵略の応酬の血
なまぐさいやりとりの中でも茶が
大きな役割を果たしていたのを思
い出す。
無愛想な神官らしき男が話してく
れた、金色の目をした神様の話は
どこに掲載されていたのだったか
...

羽化

南風野 さきは

暖炉の前の妹がおぼつかない手つきで針を操る。妹の手にある白地の布には、鮮やかな彩りの草木や鳥が縫いつけられていた。習い始めたばかりの刺繍に挑んでいる妹のそばで母が糸車を回している。馬の嘶きが聞こえた。父が放牧から戻ってきたのだろう。父を迎えるために外に出たぼくは愕然とする。夜であるにもかかわらず、弓なりの地平から暁のごとき光が湧いていた。炎によって浮彫りにされている地平の先から、無数の矢が飛来する。矢の雨を呆然と眺めるぼくに、乾いた風が焦げ臭さを運んできた。

草原の海に浮かぶ孤島のように、ぼくの育った村はあった。草原の南の国がこの地を攻めていると、噂では聞いていた。だが、今までは、その攻勢がこの村にまで及ぶことはなかった。

草の地平からやってきた軍勢が村を踏み躪る。逃げまどうことすらできなかったから、ぼくは刃を手にした。とはいえ、大人ですら分の悪い相手に十五にもならないこどもがかなうはずもない。結局、斬りつけられ、煤けた草原に倒れこむ。土にまみれて転がるぼくに、無骨な手が近づいてきた。身包みでも剥がされるのだろうか。事の顛末を見届けず、ぼくの意識は途絶する。

音が聞こえた。聞いたことのない抑揚で跳ねる人の声。遠くでさざめくそれらが釣り餌であるかのように、ぼくの意識は浮上する。

茫洋とした白光が目の前を埋め尽くしている。痺れのような薄い痛みが、まなじり 眦から頬を這いまわった。痛みによつて呼び覚まされた警戒が、細く裂かれた薄布に両目を覆われていることを気づかせる。身を起こそうとしたものの、身じろぎすらできていないことに困惑した。

「よく眠る」

鈴の鳴るような、幼い声が落ちてきた。この抑揚には馴染みがある。遠くから聞こえてくるものとは違い、この声からは意味が汲めた。

薄布がぼくの目から剥ぎ取られた。目を刺す光に眉間の奥が痛む。早魘と慈雨をほしいまま 恣にする太陽のような金色の目がぼくを見つめていた。ぼくの胸の上に座つてぼくの顔を覗きこんでいたのは、緋の衣を纏う女児だった。房飾りのゆれる瀟洒な髪留めを飾りとし、やわらかな銀糸の髪を床に滑らせている。

「眦に朱、印があるな。印があるということは、この声を聞くことができるはずだし、この身を見ることもできるはず。わざわざ出向いてきてやったんだ。呆けていないでこちらを見ろ」

金目のこどもの指先が、ぼくの臉を撫でる。撫でられたはずなのだが、なぜか、感触はない。

「金沙の髪、白磁の肌、碧玉の目。北の者か。この地の者は、北を攻めること、飽きぬものだな。北の蛮夷ばんいからこの地を護るためと称してはいるが、あちらから見れば侵攻にかわるまい。人の世のしがらみは人にしかどうこうできるものではないが、こちらは人に願われればそれが叶うまで呵責される身。北伐ほくぱつに加護を与えること、億劫ではあるが、邑むらの者に乞われてしまつては仕方がない。今年はお茶樹の花が咲かなくてな。邑の者には凶兆だ。それゆえおまえの息は延ばされたわけだが」

ぼくを射ってくる金の目が、獲物を定めた野良猫のように眇められた。

「北伐の戦利品のようなものとはいえ、今までここに連れてこられた者でどうもおとなしいのは珍しい。大概是、帰りたいと、見逃してくれと、喚くものな

のだが」

金目のちらつかせた好奇心がぼくの記憶をつついた。村がどうなったのかを確かめるのは怖い。父母は、妹は無事だろうか。金目の言葉を信じるのなら、村は北伐の名のもとに攻められ、焼き払われたということにはならないか。

己の目が鋭くなつていくことを自覚する。愛らしくも皮肉を帯びた微笑が、金目の唇を彩った。

「捧げられたその場で喰らつてやつてもいいが、おまえは遊びがいがありそうだ」

けだるさがぼくを襲う。こじあけていられなくなってきた瞼が、あどけない微笑に幕をおろしていく。瞼をとじると、何者かの足音が振動として背筋に伝わってきた。

「世話役が来るな。また来よう」

金目が囁き、微風が首筋を撫でた。多大な労力をもつて薄目をあけるも、そこに金目はいない。

いくらぼんやりしていたとはいえ、胸の上に座っていた幼子が、瞬きをした

わずかの間に音もなく消えることなどありえるのだろうか。

疑念は倦怠に吞まれ、重いだけの瞼はおちていく。

板張りの床に直に敷かれている、やわらかく厚みのある布に横たわっていたぼくは、泥から這い出すように身を起こした。喉に渴きを覚えたから、枕元にあった杯を手にする。覗きこんでみると、瞼と眦、目の縁にある朱が水鏡で揺れていた。いまだ慣れない彩りに眉根を寄せる。昏睡している間にさされた鮮やかな朱は、こすつても落ちない。視界に落ちてきた髪を払い除け、ぼくは杯を呷った。袖から伸びた腕では縫合された創が盛りあがっている。傷の程度に違いはあれど、とじた傷は全身に散らばっていた。

戸が引かれ、冷気が流れこんでくる。霧に埋もれた庭を背に、金目が世話役と呼んだ男が立っていた。象牙の肌、漆黒の髪。彫りの浅い顔立ちの男は、腰を折り、持っていたものを床に置いた。

「粥か。朝餉にはうれしいな」

金目の声がした。男の様子を伺ってみるが、黙然と座っているだけで、金目の声が届いた様子はない。

「今のこやつには、この声は聞こえぬよ。祭りを司る時のように眦に朱を刷けば別だが。化粧をほどこせば、こやつにもこの声は聞こえる。この身を形としてやれば、おまえと同じように、こやつにもこの身が見えよう」

ぼくはさぞかし呆けた顔をしていたのだろう。見かねたように男は粥を指差し、その指で空を掬う。食べろということか。その間も金目の声は続いている。「ちかく、祭りがある。最後には天灯があがつてな。夜空に数多の花が咲いたように見ごたえがあるぞ。ともに眺めることを疑いはしないが、祭りの日に、また会おうか」

ぼくだけに語りかけている金目の声を聞きながら、ぼくは匙を手を取った。

常ならば食事を運んでくる男が、今朝はぼくを部屋から連れ出した。水を浴

びせられ、白の服を着せられる。白としか見えなかったそれは、ぼくの歩みに揺れるたび、やわらかな陽にはしゃぐように淡い虹をゆらめかせた。そうして連れてこられたのが、方形の石が敷き詰められた野天の石段だった。

石段の最上に座るぼくの左右には、各々にみつつ、三本の脚に支えられた鍋のようなものが並んでいる。それらは火にかけられていて、例外なく湯が沸いていた。ぼくの前にはひとつの火。火の向こうにいるのは、目のまわりを朱で彩った、黒を纏う世話役の男。手のひらで包めるほどの小さな籠がみつつ、男の前に並んでいる。

歓声がぼくの眼を遠方へと滑らせた。蒼穹に水の弧が踊る。煙の極彩が花ひらく。極彩とぼくの間には、しなやかに反り返った屋根あった。屋根を支える壁は飾り紐で隙間なく彩られている。鮮紅が、黄が、緑が、煙たる彩りは混ざり合い、着飾った人々を霞ませていた。金物の鳴りは楽器だろう。鈍くやわらかに響く音。鋭く突き抜けるように響く音。それらと歌声が絡み合い、天地を掻き乱す奏でと成す。

狂った遊戯のごとき陽気さが、そこここで跳ねていた。

「まつり」

あの声のうねりにも、極彩に塗れたあの衣にも、覚えがあつた。あそこで蠢いているのは、あの夜、この手に握った刃をもつて、ぼくが屠つていったものそのものだ。

男は籠のひとつを開け、親指の爪ほどの大きさの薄く四角いものを、小枝を半分に折つたようなものでつまみ出す。黒でも緑でもないそれは、何かの葉を重ねて固めたものであるらしい。男はつまんだ塊を火で炙ると、銀でできた小舟のようなものに落とした。

「湯を沸かしているあれは鼎、あやつが餅茶へいちやを粉にしているあれは薬研という。あの派手な建物は廟だ。だから、ここは廟の奥になるな」

薬研を操る男によつて、塊は粉にされ、煮えたぎる鼎のひとつに落とされた。粉は煮詰められるままに踊り、透きとおっていた湯に色が滲んでくる。色のついた湯を杓をもつて杯に注ぎ、緑をゆらめかせる杯を盆に載せ、男はそれらを廟へと運ぶ。鼎の数だけ同じことを繰り返す男は、そのうちの一度だけ、ぼくに葉を扱わせた。

すべての籠が二度あけられて、すべての鼎が茶を煮立てた。最後の盆を手に廟に向かおうとした男の前に、忽然と、あのとときの金目のこどもが現れた。傲然と、金目は男に言い放つ。

「これはあずかろう」

男は頷き、廟へと歩み出した。

鼻先を湯気がくすぐった。苦いような甘いような澄んだ香りがする。眼を落とすと、ひとつだけ杯が残されていた。

「おまえはこれ知らぬようだからな。譲ってやる」

金目にうながされるまま腕を伸ばし、両手で杯を包みこむ。苦笑を帯びた声を、金目は響かせた。

「茶というものは、食物とも妙薬ともされているが、飲めば不老を得ることができるともいわれている。真偽のほどはわからぬがな」

鼎で煮立てられていたものに口をつけてみる。渋さと熱さが襲ってきた。弾かれたように杯を遠ざけ、舌先の痺れに顔をしかめる。楽しげな笑声を、金目はあげた。

「歩けるのだろう」

傲慢ですらある断定を、金目は投げつけてくる。しばらく座っていられるほどに回復したとはいえ、体力は戻っていない。それはここに来るまでに思い知っている。金目は身を屈め、ぼくの目を覗きこんだ。この金色はいけなない。魅入られ、絡め取られ、吞まれてしまう。

「ついてこい」

廟とは逆の、断崖を見せつける山の方に金目は歩み出した。落日の残滓にひるがえる緋衣に吸い寄せられたぼくは、杯をその場に残し、金目を追いかける。

冬枯れの山には背の低い木と背の高い樹が混在していた。噴き上がるように渦を巻く霧に、崖の下、蛾を誘うがごとく燈る緋の背後で深い緑が透けている。艶やかな葉を茂らせている樹木はこどもひとりでは抱えられないほどに太く、ねじれた幹は天を目指していた。やつとのこととで辿り着いた大樹の根に腰掛ける。感嘆をもって枝振りを仰ぐぼくに、金目は眼をくれた。

「先刻のあれは占いでな。豊作となるか、水厄を避けられるか。同じように点てた茶を飲んだ邑の者たちが、どの杯の葉が同じものであるのかを当てる。そ

の結果が占いの結果となるわけだが、それを踏まえて、茶を点でていたあやつがここに祈りを運んでくる。あのなかの一組がこの茶樹の葉だ」

ぼくの胸の底をさぐるように、金目の目が細められた。

「郷に帰りたいか？」

「実のところ、よくわからないんだ。でも、戻りたいとは、おもう」

ぼくの返答に、金目は目をしばたいた。

遠く、紅い光が霧にぼやけた。いくつもの紅が漂いながら夜天に昇っていく。

あれが天灯というものか。ならば、ほどなく祭りは終わるのだろう。

紐で飾られた箱を携えた男が、霧を裂いて現れた。男は金目の前に跪き、箱の紐を解いて蓋を開けた。頭を垂れた男は、両手をもって箱を掲げる。金目が箱の中を覗きこんだ。

「豊作と出たゆえ、水厄を退けることを望むか。欲深いことだ」

からかうような声に男の唇が吊り上がる。男は地に箱を置いて立ち上がり、佩刀を抜いた。霧に滲んだ祈りの灯が青銅の刀身にゆらめく。男がこちらに歩み寄る。青銅の切っ先が霧を裂いた。ぼくは樹幹に背を打ちつける。俯いたこ

とで眼が落ちて、胸のあたりに朱をみとめた。霧のゆらぎに眼をあげると、再度、青銅の閃きが迫っていた。肉を食まれ、肺を裂かれたぼくは、纏う白に朱を滲ませる。ぼくから溢れる朱は白に吸われ、筋を延ばし、絡まり、紋と化す。

「なにを急いている。これはもはやおまえの手にはない」

男に投げつけられた金目の声は、癩癩に似た怒気を孕んでいた。男が退く。ぼくの纏う白の裾から、含みきれなくなった朱が滴り落ち、茶樹の根を濡らした。ぼくから滴り落ちた朱が吸われていく。枝が軋み、葉がざわつく。そこで蕾がうまれ、膨れていく。赤子の手のような白の花弁がわれると、金色の蕊がふるえる。樹木を埋め尽くして咲きこぼれる花は、花のかたちのまま、首が落ちるように地を目指す。

金目がぼくの喉を掴んだ。唇につめたいものが触れる。狂ったように咲き乱れる花のひとつを、ちいさな手でもぎとったのだろうか。花をつまんでいるのである。指が、ぼくの歯をこじあける。舌の上に花を残して戻された指が、ぼくの唇を撫でた。

「おまえはおもしろい」

甘露のごとき囁きが、耳をくすぐる。

「こちらにおいで」

ぼくのこれまでを奪ったものが、ぼくをこれからに繋ごうというのか。

舌の根が花びらに疼く。花の甘さに喉が鳴る。ぼくの肉はこれからを渴望している。

続いていくことに縫いとめられたぼくは、嘲弄に唇を歪め、喉の奥で咲^{わら}つていた花を嚙下した。

(了)

貸出票

葉草茶伝承
神様と人

No. 6

葉山 亮一	済
水野由依	済
小山華乃	済
吉本駿	済
中尾柚葉	済
葉山 亮一	済
山本絢菜	済
神山行夫	済
水上恵子	済
終ののん	済
葉山 亮一	済

貸出

東西伝承
羽化

宮本 通	
葉山 亮一	済
滝沢 龍也	済
田辺 淳子	済
白 克	済
終ののん	済
葉山 亮一	済



もしもし？ 聡？ 久しぶり
いや、今図書館だったんだよ。
え？ 結婚した？ 子供までいるのか

君地元に残ってるんだっけか。

夏は地元がいいよな、祭りとかある
しそうだ、君のところでお茶と祭り
は…

夏の宝物

Ag

今年は祭りをやろうと正浩まさひろからメールが届いたとき、私はホテルで五時間前に合コンで出会った男と一緒だった。メールの内容は、突然の思い付きで秘密基地を作り出したり自転車で海まで行ったりしていたころの正浩のまま、自分だけが汚い大人になってしまったようで少しだけ罪悪感を覚える。

「好きな人からですか？」

横で寝ている男が言う。彼は合コンで一番人気だったが一番軽そうにも見えなかった。しかし、たとえ適当な愛の言葉だとしても、一番人気に誘われるのは悪い気分じゃなかったので二時間の予定だった夜をコンティニューしたのが三時間前だ。彼の名前は天羽雷夏あもうらいか。漢字を知ったのはほんの一分前。正浩からのメールのほかに届いていた未読メールの差出人と、アモリーライカが同一人物であることを理解するのには少し時間がかかった。

「そんなのがいたら合コンなんて来てないよ」

言い返した声は震えていた。さつき会ったばかりの男にすべてを覗き見られたような気がして、この夜で一番心拍数があがった。

「でも嬉しそうだね。解りやすく可愛い」

のんびりと天羽君が言う。二十代前半の彼に言われても嫌味にしか聞こえない。

「アラサーに可愛いとか」

「俺、最初から雛子ひなこさん狙いだよ」

大真面目な顔でそう言いながら、天羽君は服を着始めていた。

「雛子さん明日休みだよね？」

「うん？」

「飲みなおそうよ、なんかイイコトあったんでしょ？ お祝いしようよ」

偽物の愛の台詞なんかだったら帰ったと思うけど、お祝いというのは悪くないと思ったので、私はどうしようもないこの夜をもう一度だけコンティニューする。

次の日、私はひどい二日酔いとともになぜか実家の部屋で目覚めた。住んでいる街から車で一時間弱かかるこの場所へどうやってきたのかはもちろん覚えていないし、そもそもホテルを出たあたりから記憶が曖昧だ。何しに来たのかとしつこく聞いてくる母への答えが見つからなくて、私は最速で身支度を済ま

せて逃げるみたいにならぬ。

ここは緑が濃い。ここの緑に慣れてしまうと、普段見ている公園の木や街路樹はべつたりと絵の具で塗りつぶされた偽物に見える。きらきら輝くみずみずしい緑と、その影のぞっとするほどの暗さ。飼いや慣らされていない植物の野性味は美しくもあり怖ろしくもある。錆びたフェンスに絡む蔓草、アスファルトの端からじわりとしみだすように生えた苔。ここでは人の生活が緑に飲み込まれている。久しぶりに村を歩いてみると荒れた家が目立つ。住まないと建物は傷むのだなあ、とどこかで聞いたようなことを思いながら見上げたのは、昔、友達が住んでいた家だった。

麓の小学校は遠く児童数も少ないから、子供が小学生になるのをきっかけに引っ越す人は多い。この家に住んでいた子もそれで引っ越した。そのせいで四年もの間、麓の小学校は私と正浩だけのものになった。年が一番近い聡くんさとしは私たちの四つ上だし、私たちのあとに入学した子はいなかったからだ。だから正浩のことを説明するには幼馴染なんて言葉じゃ足りない。私の世界にはずっと正浩しかいなかった。

歩いていると、足は自然と緑の深い方へと向いていた。沢を渡る小さな橋を越えて、舗装されていない小路を山の方へ行くと鳥居が見えてくる。正しい名前は何度聞いても覚えられないし何を祀っているかも知らない神社だけれど、それでも苔生した小さな鳥居は周りの自然を味方につけてそれなりに迫力があるように見えた。一応手を合わせておこうと鳥居をくぐると、その瞬間を狙ったみたいなタイミングで鳥居の横にあるぼろぼろの倉庫の扉が空いた。

「もしかしてメール見て来てくれた？」

「まーくん」

頭にクモの巣をひっかけた正浩は何も変わっていないなくて、そのせいかな自然と昔の呼び名がこぼれた。

「ひーちゃんには一回会いたかったんだ。笛でできるよね？」

「何年前の話？」

私の言葉なんて聞かずに、正浩は倉庫の奥から笛を出して私に差し出す。懐かしさがこみあげて歌口に息を吹き込んでみたが、密度が低く頼りない音しか鳴らない。

「無理だって」

笛を返すと今度は正浩がそれを構える。中学生じゃあるまいしとは思うのだが、どうしても歌口に目が行ってしまう。薄く開いた唇の隙間から息が吹き込まれる瞬間、少しだけ体温が上がる。

そんな淡い胸の高鳴りを一瞬にして跡形もなくかき消したのは、死にかけの鳥のため息みたいな笛の音だった。

「俺よりマシだろ？ それに神輿の人手不足が深刻」

なぜか得意げに正浩が言う。話を聞くと、祭りに参加する若手は今のところ正浩と私の兄と聡くんしかいないとのことだ。

「だから笛お願い」

昔からずっと変わらないその言い方は、私が断ることなど想定していない。だって私は秘密基地だって自転車の旅だって、できることは全部いいよって言ってやってきた。優しくしていたらきつといつか正浩が私を好きになってくれると思いながら。

「わかった、頑張る」

笛を受け取る私の気持ちは絶望そのものだった。正浩は私を好きになつたりはしない。だって正浩は去年の春に結婚している。

祭りは毎年八月五日と決まっています、今年は水曜だから私の大事な有給休暇が二日分消えた。その一日目はちらし寿司の具と小豆を煮て終わった。お供えする寿司とおはぎは祭りの後で村の人に配る。親戚を呼ぶ人も多いから限界集落寸前のこの村でもなかなかの量が必要だった。昨日のそれで火を使うことは終えたつもりだったのだけど、今日も私は集落センターの台所でコンロの前にいる。あとは涼しいところで仕上げるだけの寿司とおはぎは、手伝いにきたおばさんたちに持っていかれた。それなら神社の方に様子を見に行こうとしたところでおばさんの一人にお茶を作つとかなくちゃと引き止められて今に至る。買ってくると言えばもったいないと言ひ、水出しできるのに生水は危険だと言つて煮出さなければ許されない。味方の顔をした悪魔に逆らう気も起きず、

仕方なく私は言われたとおり麦茶を作り続けている。

沸騰したヤカンのお湯にティーバッグを放り込み、しばらく煮出したなら、ティーバッグを捨ててヤカンを沢まで運ぶ。台所は地獄のような暑さだから、日がさしていても外の方が涼しい。川に行けばさらに涼しく、汗に濡れたTシャツが冷たく感じるくらいだ。川の流れの緩くなった場所にはカゴに入ったキエウリとさつき置いたヤカンが冷えていて、持ってきたヤカンと冷えたヤカンを入れ替えたなら集落センターに戻る。冷えた麦茶は氷と一緒に大型の水筒に入れて、空になったヤカンはまた水を入れて火にかける。ふとテーブルを見ると、さつき神社に持って行った水筒が空になって戻ってきていた。昨日より作業は楽だけど、終わりの見えない繰り返しに心が折れそうだ。

「暑いね、雛子ちゃん生きてる？」

信用金庫の団扇で空気をかき混ぜながら入ってきたのは聡くんの奥さんの靖恵やすえさんだ。彼女も今日は笛を吹くので練習するうちに仲良くなった。

「ママ、もらったー」

あとからついてきた聡くんの息子は両手にちらし寿司のおにぎりを持ってい

た。靖恵さんは笑って彼の頭を撫でる。

「良かったね、もう少し遊んでおいで」

人見知りをしない彼が奥の部屋に戻っていけば、おばさんたちが盛り上がる声が聞こえる。

「出来たの沢で冷やしながら休んできなよ」

折れそうだった心に靖恵さんの申し出はとてもありがたかった。

「正浩くんも酷いよね。こんな大変なこと雛子ちゃんにばっかやらせて、自分の奥さんにはなにもやらせないんだもんね」

溜息のついでみたいな声で靖恵さんが呟いた。これまでも昨日も、正浩の奥さんは準備に顔を出していない。そのせいで彼女をよく思わない人は多いようだ。同意も否定せず曖昧にしたまま行こうとすると、ぞっとするほど暗い靖恵さんの言葉が私を追いかけた。

「雛子ちゃんが正浩くんのお嫁さんならよかったのに」

その言葉はおばさんたちからも散々言われたものだった。最初は聞き流していたけど、こうも連続で言われるとどうして私じゃなかったんだろうと考えて

しまう。曖昧な笑顔で誤魔化して、私は逃げるように沢へ向かった。

ヤカン二つとキュウリが並んでいる光景をぼんやり眺めながら膝まで川に入って涼んでいると、ポケットの中で携帯が震える。受信一件。差出人は天羽君だった。

「お祭り楽しんでる？ 行きたいなー俺、金魚すくい上手いですよ。あとりんご飴食べたい」

天羽君が思ってるような祭りではないのだけどなあ、と思いながら私はのんびり返事を考える。

「彼氏から？」

いつの間に来たのか、声をかけてきたのは正浩だった。

「違うよ」

天羽君とはあれからよく会っているけれど、彼氏と呼ぶのは違う気がした。

嬉しそうな顔してたから彼氏だと思ったのに、と言いながら正浩は川の中のキュウリを一本取る。

「まーくんの奥さん来ないの？」

ずっと聞きたかったことを聞くと、正浩は少しだけ驚いた表情をした。

「昨日から娘と実家帰ってる。笑えるだろ？」

何も言葉を返せなかった。正浩が頑張って準備したのだから祭り当日ぐらい見てあげればいいのにと、私だったら正浩にこんな表情はさせないのにと、口を開けばそんな思いが零れてしまいそうだ。

しゃがんでキュウリを齧りながら正浩は言う。

「祭りの日って毎年親が会社休んで朝から忙しく準備しててさ、祭りに行けば周りの大人がみんな優しくしてくれて。ま、寿司かおはぎくれるだけなんだけど」

「うん、さっきも聡くんの子供が貰ってた」

正浩が語る思い出は、私の思い出そのものだ。日曜でもないのに親が家にいる一日は特別だったし、椎茸は嫌いだけどちらし寿司のおにぎりの中にある椎茸は食べられた。りんご飴も金魚すくいもないけれど、毎年祭りの日は宝物みたいだった。

「俺が楽しかったことを娘にもしてやりたかったんだけど」

そう言って笑う正浩の横顔は大人びていて、少しだけ疲れていた。正浩が祭りを復活させようと言い出した理由を知って驚いた。結婚して家を継いで子供を育てて、正浩が昔から何も変わっていないわけがなかった。何も変わっていないのは私だけだ。

「来年もやろうよ、祭り」

私はそう言うとヤカンを持って、逃げる準備を整える。一つだけ深呼吸して、やっと大人になる準備ができた。

「正浩の奥さんと娘ちゃん、あと私の彼氏呼べるまでやろうよ」

言い逃げして橋まで来ると、ぼろぼろ涙が零れてきた。悲しいとか辛いとかよりやっと失恋できたという安堵の気持ちが大きかった。

集落センターへの道を歩きながら、天羽君にメールを返していないことに気付いた。涙はいつの間にか乾いている。なんとなく天羽君の声が聞きたいなって思っただけでよく考えずに発信ボタンを押した。

「え、雛子さん？」

天羽君はすぐに出た。かけてしまってから平日昼間であることを思い出し、五コールだけ鳴らしたら諦めようと思っていたので驚いた。

「なんかあった？」

早口で天羽君が聞いてくると、声が聞きたかったなんてどうでもいい理由で電話したことが申し訳なくなる。

「何かあったわけではないけど」

それらしい理由を考えていると、きらりと山の方で何か光った。よく見ると、神社の前に出されたお神輿だ。右手の人差し指と親指で光をつまめばまるで宝石みたいだ。

「この祭りを誰かに自慢したくなって」

言うてから、声が聞きたいの方が可愛かったと後悔した。電話の向こうで天羽君が笑っている。

「俺もその祭り行っている？」

「実家の祭りだし、三時には終わるよ？」

「えーっと雛子さんの実家って一時間くらいで行けますよね？」

「なんで知ってんの？」

「合コンの日、送ったでしょ」

あの記憶のない日のことを思い出すのに時間がかかっていると、電話の向こうからは大きなため息。飲みすぎって言われて何も言い返せない。

「日曜出勤すればいけると思うんで、行きます」

「え、でも、大した祭りじゃないし」

日曜出勤に釣り合うとは到底思えないのに、天羽君はそれでも来るといふ。

「俺にとっては雛子さんから着信するのが大したことなんで」

「金魚すくいもりんどご飴もないよ？」

「何があるの？」

「ちらし寿司とおはぎ、あと麦茶があるよ、私が作ったやつ」

「じゃあ十分だ、すぐ行くので待っててください」

天羽君がそう言って電話は切れた。川で涼んだはずなのに顔は熱いし、心臓は耳の中にあるみたいだった。

もしかしたら天羽くんもお神輿を担いでくれるかもしれないから法被を準備しておこう。若手の担ぎ手が増えたらきつとみんな喜んでくれる。

天羽君のことを考えながら歩く足は自然と一歩ごとに速くなる。暑い台所にも面倒なおばさんにも鈍感すぎる初恋の人にも、何にだって立ち向かえると思った。だってもうすぐ天羽君が、私の彼氏がやってくる。

やっぱり
この本も、借りてる
「柗ののん」さん
選書が似てるし
珍しい名前だから
頭に残る

貸
出
票

石岡武	
豊田米	
山岸百	
溝口嘉	
三好涼	
乾友香	
志賀真菜	
二宮国夫	
吉永量子	
柗ののん	
葉山 亮一	

貸出票

お茶と地方民俗

No. 2

野 篤子	済
葉山 亮一	済
滝沢 龍也	済
北風はるみ	済
柗ののん	済
葉山 亮一	済

貸出票

祭りと関わる茶

No. 6

小西義久	済
菊田実	済
永島陸	済
佐川恵理子	済
田代文康	済
岡本寛之	済
飯野茜	済
柗ののん	済
葉山 亮一	済



この図録に記載されている茶葉、榮華祭典で有名なあの王国で姫様付きの執事に売ったと記載されている。

茶言葉は「侮蔑」

いや…なぜこんな、言葉をつけられたのか…これをレポートテーマにすべきだろうか



彼女の軽蔑 彼の侮蔑

櫻 いいよ

お嬢様
じょうじょうさま



今年こそは榮華祭へ
えいかさい

行かん



今日は

年に一度の
榮華祭典
えいかさいてん

国中が盛り上がる



この国の繁栄と
この国の王に

感謝と祈りを
捧げる日、らしい

城の庭を開放し
国中の民が集まる

商人が店を並べ
踊り子が舞う

そしてその日だけ

王族が民の目線に合わせ
語り触れることができる

私が一年で
最も嫌いな日



この国の王女として
ただ生まれただけの
からっぽな私が

『私』というだけで
崇められ褒められ感謝され
全てが許される



普段は口うるさい
この執事にも

しかし



榮華祭典とは
王族と民をつなぐ
大切な祭だと
何回言えば……

……



ぐちゃぐちゃ
王女としての
自覚が足りない
どっぴろ
おがままな
トコロは
ぐちゃぐちゃ
何であんな
人ですか
ごめん
ごめん
ごめん
自の勝手と
言われまふ所であー
子供
……



はい



今日はお前も
私を甘やかす日じゃ
なかったのか？



はじめはただ
うるさいこいつを
困らせたかっただけ

今日がそんなに
私が感謝される
日だというなら

お前も今日は
私に跪いてみる



『今日』と『私』であるだけで、なんでもするバカな男



この国にない
花から採ったとか



そういうえば先ほど
隣国の商人から
珍しい紅茶を



哀れな民
哀れな男



ただ、姫という名を持つだけの私に跪く

はい

嗚呼、なんて
くだらない
男



くだらない、バカなお嬢様

柗ののん……さん
もしかして
よく図書館の読書室でみかける
あの女性だったり

いや…まあ…
ないだろうけど……

貸出票

榮華祭の逸話 No.2

小倉 千代枝	済
大平 真樹	済
飯塚 友美	済
柗ののん	済
嶋田 仁美	済
山 洋助	済





茶と祭りの民俗調査でお世話になった巫女の絹華さんの訃報を知ったのは、一緒に調査へ行った教授から伺った。

とても美味しいお茶を出してくれたことを覚えている。

伝統は途絶えてしまうのだろうか、あとで社務所へ、電話してみよう。

青藍に咲く

志水了

久しぶりに見たあのひとは、かつてのあのひとはまったく違う顔つきになっていた。

幼い頃を過ごした社に戻り、この社の「神」である久輝ひさきに久しぶりに会った時、向けられたのは、激しい敵意の視線だった。

冷え冷えとした、鋭利な印象を持つ顔。鋭い青年の眼差し。かつてと全く同じ顔なのに、彼から受ける印象は真逆だ。

少女、明夏めいかは、暖かいまなざしで久しぶりの再会を喜んでくれるとばかりに思っていたので、そのことにひどく動揺していた。彼は動揺している明夏を置いて、ふいと顔をそらすと、そのまま奥にある彼の部屋へと戻ってしまった。

「ごめんなさいね。絹華きぬか様が亡くなってから、ずっとこんな調子で」

明夏の斜め後ろから細い声が聞こえてきて、明夏はなんとか意識を戻す。振り返れば、小さい頃からお手伝いとして社に住み込みで働いている小夏が、申し訳なさそうに眉を下げていた。

「いえ、小夏さんは悪くありませんよ」

明夏は辛うじて動揺から立ち直ったものの、それでも心細くなってしまった

のだった。

明夏は故郷を離れ、巫女としての修行を送っていた。だが明夏の育ての親でもある巫女の絹華が亡くなり、修行を急遽切り上げて、幼い頃を暮らしていた村の社に戻ってきたのだ。

絹華が死んだのは社がおよそ七年ぶりの式年祭をとりおこなう年であり、祭りをおこなうため少し早かったものの、明夏が次の巫女として、呼び戻されたのだ。

式年祭では、村に「神」の加護の力を与えるという大役がある。村に神の力が振りまかれることで、村はまた七年、生き延びることができる。村にとって、大事な祭りなのだ。

だが「神」がこの状況では、祭りどころか会話をすることさえままならない状態だった。

明夏が久輝との心の距離に動揺し、祭りまでの間どうしようか考えている間

にも、じりじりと祭りまでの日は近づいてくる。

「何の用だ？」

生ぬるい夏の風が吹いてくる社の一室に、久輝は座していた。今日は機嫌が良いのだろうか、珍しく笑みを浮かべている。

明夏は彼の前に座ると、手ずから入れた緑茶を差し出した。久輝の目が緑茶にそそがれる。昔、明夏にお茶を入れてくれとよくねだったものだ。覚えているだろうか。

明夏はじわりと額に浮かんだ汗をぬぐうと、心を落ち着かせるために緑茶をひと口含んだ。さわやかな苦みが、口の中を広がっていく。

「舞台をみんなで直してくれることになったわ」

明夏の言葉に、ゆっくりと緑茶を飲んでいた彼の動きが止まった。彼が目を丸くして、明夏を見てくる。

彼が何かを言う前に、明夏は立て続けに口を開いた。

「これに必要なものはすべて揃ったわ。あとは、私達だけ」

明夏が戻ってきてきてまず行ったのは、儀式について絹華が残した帳面を探すこ

とだった。

残された帳面は、絹華の部屋にあった。絹華の字で、儀式の手順が詳細に記されているものだ。基本的な動作などは明夏も身に着けていたが、こういった細かい手順は、社にそれぞれ伝わっていくものなのだ。だからこそ、残された手順をなぞっていかねばならない。

手順には、社の近くにある舞台でとりおこない、さらに神の力を完全に使いこなすために神と気持ちを一体化させる必要があると書かれていた。

舞台は、社の近くにある、集落を見下ろせる高台にあるものだ。戻ってきてから一度見に行ったが、ひどく荒れていて驚いたものだ。最後の儀式から長い間使われていなかっただけでこうなるのだろうか。明夏が幼いころは、集落の人々が度々手入れをしてくれたので、ここまで荒れることもなかったはずだ。

少しずつ、集落の人々の心が社から離れているのを感じる。久輝が変わってしまったのも、皆の気持ちが社から離れてしまったからなのだろうかと思うほどだった。

久輝とこうして対面する前、明夏は集落に行き、皆に祭りの必要性を訴えていた。はじめは皆、古くさい過去の慣例にあまり興味が無さそうだった。それでも明夏の必死の訴えに、もう一度過去の華やかな祭りの光景を思いだそうと、協力してくれることになったのだ。

問題は神と心を通わせねばならないということだ。これができなければ、儀式を行うことができない。

あとは私達だけだ。まさに言葉通りの意味だった。

だが、久輝の少し緩んでいた表情がまた厳しくなってしまった。また彼と距離が離れてしまうのを感じる。

それは嫌だった。もちろん祭りの大役をこなせないことも嫌だったが、それ以上に彼の心が明夏から離れてしまうことが嫌だった。

離れていた間に久輝は変わってしまった。だが決して全てが変わってしまった訳ではないはずだ。

「お願い。絹華さまの遺志を継ぐためにも、あなたの力が必要なの」

明夏の言葉に、久輝はわずかに目を伏せて、じっとしていた。彼は何と戦っ

ているのだろうか。昔のように悩みを教えてくれないことが、とても歯がゆい。

久輝は目を伏せたまま、そつと緑茶の茶碗をかたむけた。白くて細い腕も、鋭い眼差しも昔の彼と何ひとつ変わらない。はるかな昔は人であつたらしいが、今「神」としてここに在る彼は、明夏のように成長して、年を取ることもない。

「分かった」

明夏には永遠とも感じられる時が過ぎて、久輝はぽつりとこぼした。彼の言葉に、明夏は思わず身を乗り出す。

「ほんとうに？」

「お前が村のためというならば、俺は断るつもりだった。だが、お前は絹華のためと言う。絹華のためと言われては、俺もやるしか無いだろう」

久輝は明夏が戻ってきてはじめて、優しく笑いかけてくれた。

だから、明夏も彼が昔のように戻ってくれたと信じてしまったのだ。

祭りの当日、絹華の部屋に干されていた衣装を見上げていた。目を閉じれば、この部屋で笑う絹華と、暖かな縁側で寝転んでいた久輝の姿が思い出される。

修行を終えれば、またあの日々が戻ってくるのかと思っていた。巫女の修行を終えた明夏を頑張ったねと絹華が迎えてくれるのかと思っていたのだ。

だが目を開けても、ぽっかりと主が不在の部屋が広がるだけだ。ここに帰ってきてからずっと堪えていたものが溢れだしそうになり、何度もまばたきをす

る。

そんな時、廊下から慌てたような足音が聞こえてきた。

「大変です！」

部屋に飛び込んできたのは、小夏だった。彼女は久輝の支度の手伝いをしていたはずだ。

明夏の心に嫌な予感がわき起こる。その嫌な予感の外れることなく、久輝がいなくなった、との言葉に明夏は彼の部屋まで駆けていた。

彼が普段日々を送っている部屋へ飛び込む。がらんとした部屋には、彼が着

る予定だった衣装が吊されているだけだ。

信じていたのに。明夏は唇を噛みしめる。だがここでくじける訳にはいかない。

「私、探してきます。小夏さんは戻ってきたらすぐに動けるよう、準備をお願いしますね」

「分かりました」

小夏は張りつめた表情ながらも、しっかりとうなづく。明夏は薄暗くなっている外へと飛び出した。

社の外は、普段とはまるで違って喧噪に包まれていた。舞台から集落までの道には灯籠が置かれ、灯りが点されている。そして祭りを楽しむ人々。

明夏は久輝の行方について必死に考える。この喧噪の中、彼はどこへ行ったのだろうか。

久輝が大役を共に担うと頷いてくれたあの時、あの言葉は決して嘘ではないと思っていた。今、こうして彼の姿は見えなくなってしまうが、それでも何か理由があるはずに違いないのだ。

明夏は集落に降りて、祭りのまっただ中を駆け抜けていった。集落を駆け抜けて社の反対側に位置する山の中に入る。鳥の鳴き声が聞こえた。

山の中に入ってすぐ、そこには樹齢数百年を越すであろう一本の大樹がある。幼い頃、久輝と絹華と三人で、度々遊びに来た場所だ。

やはり久輝はそこに立っていた。明夏に背を向け、大樹にそっと手を当てている。彼の白い衣が暗いなかになく輝いていた。

明夏が来たことは分かっていただろうに、久輝は振り返らなかった。背中では明夏を拒絶しているように感じられる。

それでも、このまま戻るわけにはいかない。

「久輝」

明夏がそっと彼の名を呼ぶと、久輝はゆっくりと振り返った。振り返った彼の面は、強い神の気が満ちあふれていた。巫女である明夏だからこそ感じ取れる、強い気配。普段は隠しているから、わざとこうして見せているのだろう。

ぐう、と喉が鳴る。修行している間にも一度も味わったことのない強さ。久輝とは幼い頃から共に遊んできたが、こうしてみると、本当に彼は己とは違う、

ひとではない何かなのだと思ひ知らされる。

それでも、明夏は久輝と共にいたいと思うのだ。彼の心がどこに在るのか、知りたい。

「もうすぐ祭りが始まるよ。……やっぱり私じゃだめなの？」

明夏の言葉に、久輝の表情が少し曇った。それはここに戻ってきてからさんざん見ていた怒りの表情とは少し違っていているようにも思えた。

「なあ。お前は何とも思わないのか？」

「……え？」

ここに来て、はじめて彼はゆっくりと口を開いた。声音は聞いたことのない低さで、何かを押し隠しているようにも感じられた。

「絹華が逝ってしまったばかりだというのに、どうしてみんな楽しそうに祭りの準備をしているんだ？ 絹華はみんなから慕われていたのに。お前だって、なぜそんな平気な顔をしていられるんだ？ あいつのことを忘れてしまったのか？」

激情を抑えるかのように、彼の言葉はところどころ震えていた。神の気配が

いっそう強くなる。彼の手は固く握りしめられていて、白く色をうしなっていた。

ずっと彼が抱えていた怒りとは、これだったのか。みんなが絹華を亡くして、悲しんでいたはずなのに、すぐに忘れてしまったかのように祭りの準備を始め、感情のやり場が無くなってしまったのだろうか。

はじめて、そしてようやく彼の本当の心に触れることができたと思った。

どうしてもっと早く教えてくれなかったのだろうか。じわりと胸のなかに広がったのは、悲しさだった。怒りにも近い、寂しさのようなものだ。

はじめからもっと、ぶつかってきてほしかった。こんなにぎくしゃくするなら、昔のように派手に喧嘩をすれば良かったのだ。一緒に泣いて、笑った、あの頃のあたたかな雰囲気を取り戻したくて、今日までかけぬけてきたのだから。

「忘れる、ですって……？ 私だって、泣いたまままでいられるなら、ずっと泣いてるわよ！」

気が付けば、明夏は叫んでいた。

「泣いても絹華さまは戻ってこない。戻ってこないんだから、絹華さまが私に

残したことをしなければならぬのよ！ そうじゃないと、何も守れない！」

ようやく彼の心を知ることができた安堵からか、ずっと張りつめていた気持ちがゆるんだからか。いつの間にかぼろぼろと涙をこぼしていた。最後には言葉が出なくなつて、ひたすら手で涙を拭いながら、涙を抑えようとする。

ふいに、久輝が近づいてきたのが、涙で滲んだ視界に映った。彼は明夏の手をそつと押さえると、丁寧に明夏の涙をそつと拭う。ひんやりとした彼の手の温度が、心を落ち着かせてくれるようだった。

「すまん。……お前は強いな」

「……強くなかない。ただ、しがみついているだけよ」

ぐすぐすと鼻を鳴らしながら、明夏はぼそりと呟いた。そう、己は役目にしがみついているだけなのだ。しがみついていなければ、何かが折れてしまいうなのだ。

「それでも、お前は強い。……俺に従おうと思わせるほどにな」

久輝の言葉に驚いて、涙もひといきに引っ込んだ。そんな明夏に彼は小さくほほえむ。

明夏の手を取ったまま、久輝は静かに膝を折った。彼の口が小さく開かれる。彼の口から紡がれたのは、祝詞だった。社に代々伝わる祝詞。短いが、朗々と紡がれていく。

祝詞が終わった瞬間、明夏の手を通じて、彼の神としての力が流れ込んでくるのが分かった。

この集落に恵みをもたらす、豊穰の神の力。温かいこの力こそ、久輝の本質なのだろう。強い力だったが、明夏を拒んでいるようには感じられないので、大役は何とかこなせそうだ。

「謹んで賜ります」

明夏がそっと目を伏せた。決意を新たに、もう一度久輝を見上げる。

「いきましようか」

明夏の言葉に、久輝も頷く。

二人は連れだって、灯笼に点された集落の道を小走りに社へと戻っていく。本格的に夜の帳も落ち、社の舞台へ向かう人々の姿も増えてきた。

戻っていくさなか、久輝は思い出したかのように振り返った。白い衣が灯笼に照らされて闇の中、鮮やかに白く輝いている。

「祭りだから酒を用意してあると思うが」

「ええ、もちろん」

「酒は好かぬ。祭りが終わったら、お前の茶が飲みたい」

久輝は満面に笑みを浮かべていた。ほのかに闇に浮かび上がる笑顔。幼き頃に見たものと、同じ笑顔だった。

(了)

葉山 亮一さま

つぎは何を
借りますか？

柗ののん

君と会ったこと
ありました？


葉山

貸出票

地方民俗伝承 No.2

飯田俊紀	(済)
葉山 亮一	(済)
柗ののん	(済)
結城はじめ	(済)
葉山 亮一	(済)
柗ののん	(済)
葉山 亮一	(済)

これはまさか
出会いという
やつでは？

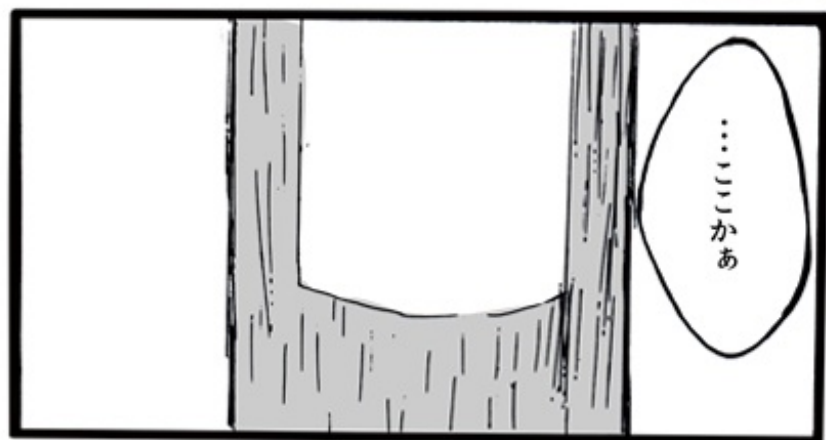


研究室が同じの斉藤くんは
教授の薦めでフィールドワークに出
たらしい。

図書館に詰めて調べてばかりじゃな
くて、外に出て調べるべきか
いやいや、まずは下調べだ。

年に1度の出会い探し

伊佐雄



とある山間の村にて
祭りがあると聞いて
大学の夏休みを使って
ここまで来た

その村は本当に小さくて、
教授が言うような
大きな祭りがある様には
到底思えなかった

教授も
何考えてんだか

まさか
奇祭じゃ
あるまいし

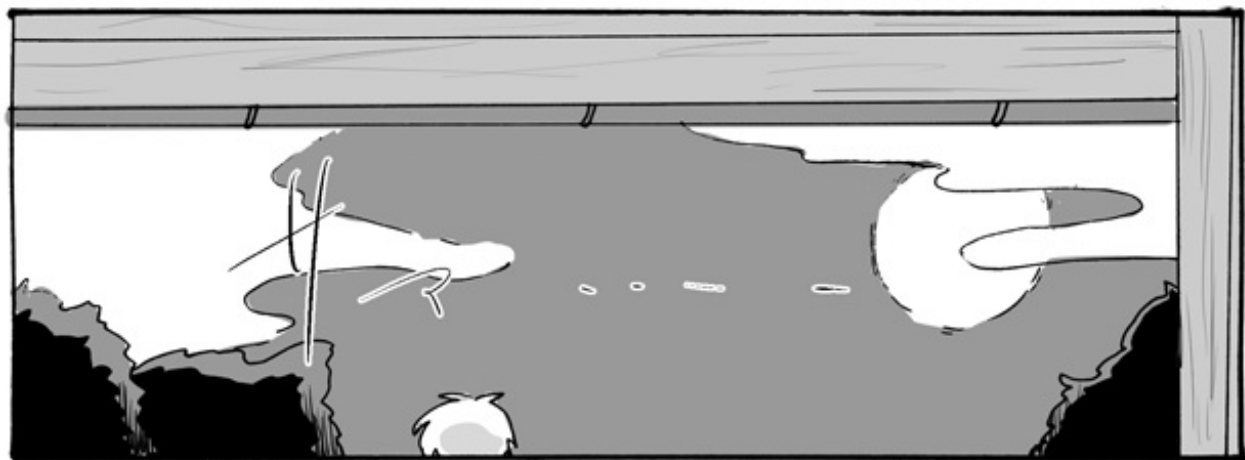
ぐぬぬ...

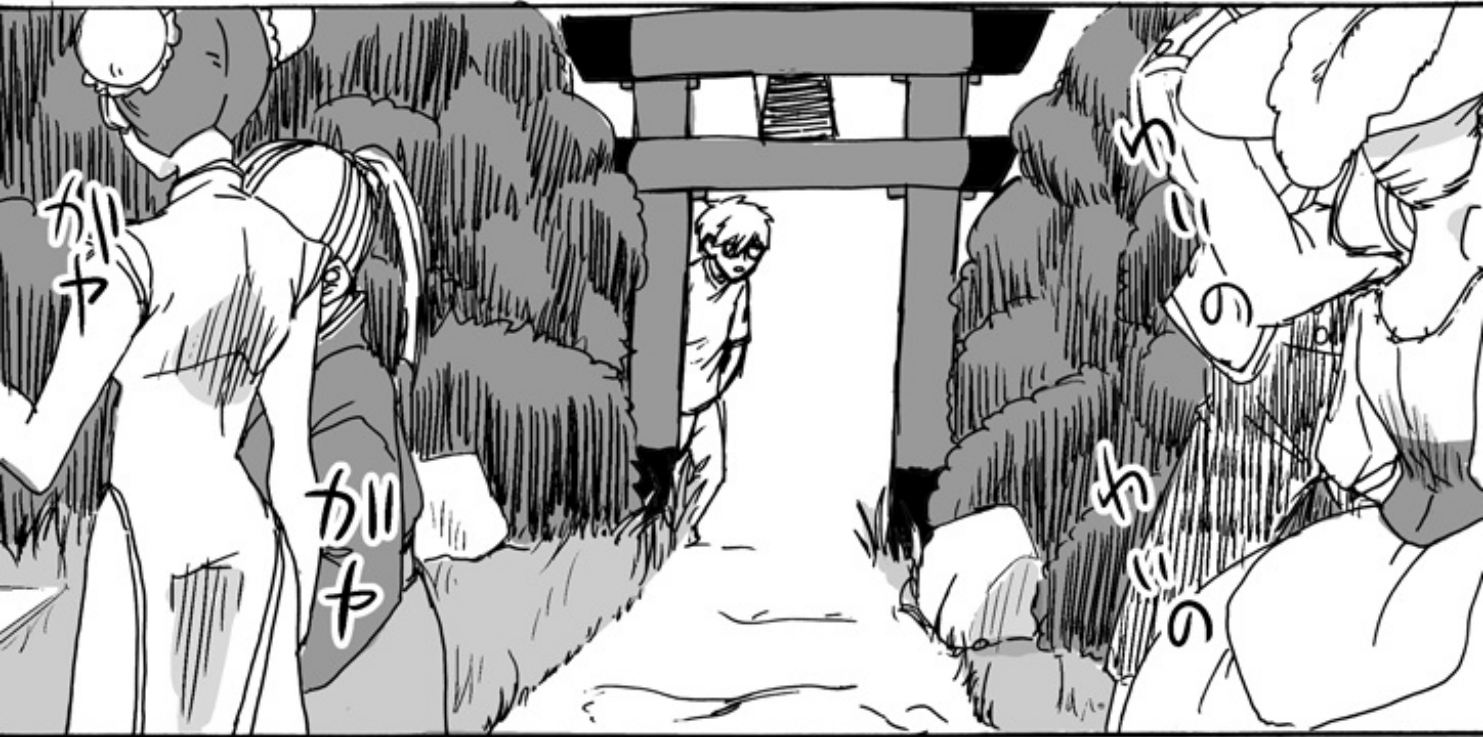
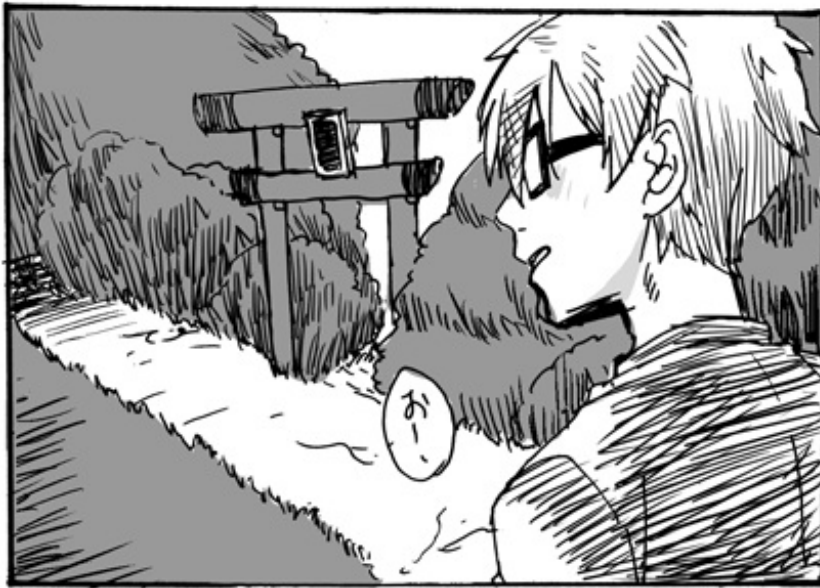


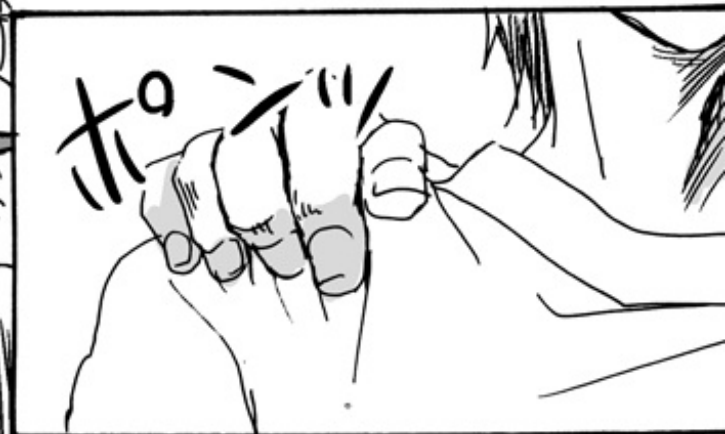
失礼しました
斎藤和宏です

ハイ、
ヨロシク











ブレニツツイ殿

我らが
主催者



おや?



いや、俺、大学の教授に
ここなら美味しい茶が飲めると
聞いて来たんですけど



男爵
お前さんに
用があるとヨ

あいや

そうですか
こんな所まで
ご苦労様です



如何にも
青年、
君の探すものは
ココにある



いかがかね

年に一度、
古今東西全ての
茶の集まる祭りの

君のための
唯一のブレンドだ

俺の唯一

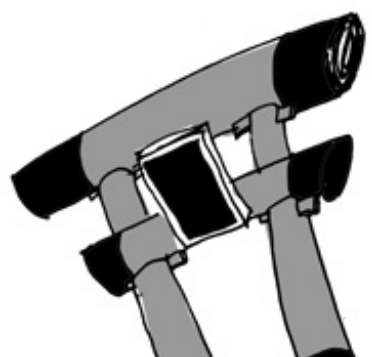








はい、
とも



はい、
とも

後日

先生！
先日は有難うございました！
いやー
貴重な体験ができましたよ、
うまいお茶も飲みました！

は？

あれ嘘だよ

嘘才!!

貸出票

フィールドワーク発表 No.2

氏名	貸出状況
清水 宗市	済
藤井 倉美	済
小田 訓	済
山岡 淳子	済
新田 利次	済
齊藤 和宏	済

フィールドワークは
終さんの範疇外…か

あ、いや…
何考えてるんだか…
レポート、レポート！
目的が変わってきてる！

貸出票

と任命状 No.5

氏名	貸出状況
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済
	済

貸出票

お茶と魚の関連性 No.2

氏名	貸出状況
持田雅史	済
小宮祐子	済
奥村金次郎	済
矢崎桂子	済
浅野紅葉	済
西口彩葉	済
池田香里	済
古屋舞衣	済
川嶋柚花	済
猪俣幹彦	済
平川享	済
葉山 亮一	済

貸出票

氏名	貸出状況
中原和	
花田優太	
白石七菜	済
古橋英次	済
橋本咲来	済
中田真尋	済
長浜正義	済
大庭林檎	済
浅田鈴子	済
大和裕	済
葉山 亮一	済



「幻想動物とお茶の事典」
幻想動物というと、グリフィンとか
ユニコーンとか人魚とか。

子供の頃から読みあさった楽しい一冊。
ひとでない生き物もお茶の楽しさを知っているというのは面白い。もう一度ページをめくればお茶と祭りに関わる伝承が見つかるかも……

ロザリー

神奈崎 アスカ

春風と共に人々の賑やかな音色が村のそばにある湖まで届き、水面から顔を
出す人魚は音色の方向より訪れる少女に目を留め、見定めるように目を細めた。
乱雑に麻袋を持つ少女は、水面で尾びれを見せる人魚の姿を見つけた途端、
青い目を丸くした。

「ホントにいたんだ、人魚」

「そうよ、驚いた？ で、あんたの名前は？」

人魚は名を尋ねるが、硬直した少女の返事は一拍遅かった。

「僕の名前はロザリー。儀式っていうのはあっちの小屋でこのお茶を淹れるこ
となんだよな、確か」

湖畔に佇む小屋を、麻袋を掴む手で少女は指し示す。

「そうよ。この水を使ってお茶淹れて、あたしと飲む。簡単でしょ？」

粗雑な少女の立ち振る舞いを気にせず、人魚はにやりと笑う。しかし、人魚
を見つめる少女の目には不満の色が残っている。

「儀式、っていうよりお茶会だな」

「祭りに参加したかった？」

溜め息混じりの言葉から真意を拾ってやると、少女は虚を突かれたのか、僅かにのけぞった。

「祭りもいいけど、人魚とお茶会する機会なんて無いわよ。断ったら村ごと沈めるだけだし」

唇に弧を描き、人魚は冗談半分に言う。少女の顔が一瞬で強ばったので、次いで軽く声を立てて笑ってみせた。

「冗談よ。あまりにも扱いが酷かったから嵐を呼んだことはあったけど」

「それってまさか、三十年くらい前のやつ？」

「そのくらい前だったかしら。ま、あんたがハマしなかったら大丈夫よ」

肩を竦め、人魚は視線を小屋に向けつつ言う。それに気付いた少女は、「じゃ、じゃあやってくる」と言い、金色のおさげを揺らしながら早歩きで小屋へ向かった。

事の始まりは百年ほど前だったか。少女が代替わりする度、人魚は思い出す。この湖に住み始めた頃、不作に悩む村人が湖に祈っている場面を見かけたのが最初。

確か、人間の飲み物が気になるという理由だけで『毎年収穫に合わせて水を運んであげるから、代わりに摘みたてのお茶をあたしに飲ませなさい』と言った筈。お陰で水の守り神と崇め奉られ、気付けば人魚の知らない場所でも祭りが行われるようになっていた。神様扱いされるのは気分がいいが、煩い事は好まないのが人間の祭りはどうでもいい。

春の日差しが心地よい。小屋のほとりにある白い岩に体を預け、お茶が入るまで寝るのもいいか。と考えた時に限って、実行出来なくなる。

対岸で、何か重いものが湖へ落ちる音がした。重さ、音、沈み具合からして、恐らく人間、成人男性ほどか。人魚は潜った。

沈んだそれは案の定成人男性の体躯で、白く長い髪に反して顔は青年の様。近付いた人魚は青年の衣服を掴み首筋に触れる。まだ生きている。人魚は青年を抱え、小屋の方へ進む。顔を上げれば、両手にトレーを持つ少女が足で小屋の扉を閉める姿が見えた。

衣服に染み込む水分のせいで貧相な見た目より重くなった青年を勢いよく地上へと投げれば、少女はぎよっとしたが、すぐさま駆けつける。

「わっ！ 一体何があったんだよ」

「寝床に人間の死体を沈めておきたくないの、よっ」

魚の死体は自然の摂理だが、人間は異なる。ほとりにある岩に乗り上げ、人は少女へ手を差し出した。

「へ？」

「お茶」

「いや、この人」

「生きてるし、ほっとけば目え覚ますわよ。それよりお茶」

少女は胡乱げに人魚を見たが、渋々という体でトレーに置いているポットからカップへお茶を注ぐ。今年はどうな味だろうか。期待を胸に受け取り、人魚は一口含んだ。カップを持つ手が固まり、無理矢理飲み込む。

「くそまず」

眉間に皺を作り、人魚は吐き捨てるように言った。勿体無いので捨てはしな
いが、不味い。少女が不思議そうに見てくるので、思ったことを口に出してやる。

「ポットもカップも温めた？ お茶の抽出時間は予め計った？ 茶葉の分量も計ってる？ 水はちゃんと沸騰したやつよね？」

「なんで人魚のあんたが詳しいんだよ！」

「伊達に百年飲んでないわよ。淹れ方だって何度も聞いてんだし」

茶葉自体は平年通りの質だろう。だが、舌に残る味は本来の風味を出し切っていないことを人魚に告げてくる。睨む人魚に、少女は負けじと声を張り上げる。

「し……仕方ないだろ！ お茶淹れるの初めてだったんだ」

「初めてえ？ 普通こういうのは事前に練習するもんでしようが」

予想の斜め上に行く反論に、人魚の声が上擦った。開き直ったように見える少女へ何と言ってやろうか、村を沈めると言ってやろうかと思つた時、小さくせき込む声があった。二人揃つて声の主を見る。

少女は慎重に手を伸ばし、青年の顔に張り付く白髪を除ける。触れたからか、青年はゆっくりと目を開いた。その目の、なんと白いことか。

色無し。そんな単語が脳裏を掠めるが、改めて二人を見た途端、思い出した

ことを忘れた。

心配そうに眉尻を下げる少女と、虚ろな目で少女を見上げる青年。視線は交わったまま、何一つ発することなく二人は見つめ合っている。そこには、心を攪られるような柔らかい雰囲気は渦巻く。

これつてもしかして。人魚もまた黙って、少しぬるくなった茶を啜る。歴代の少女らから聞いたことはあるが、よもや第三者としてその現場を目撃する日が来ようとは。

一目惚れとは、思ったより美味しくない。

茶畑の広がる村に長年続く儀式。祭りの日、年頃の少女が湖に住まう人魚へ、その年一番の茶を振る舞う。神秘性を持たせたかったので、儀式の継承は少女同士の口伝のみ。

遠くから祭りの音色が響いてくる湖で、少女と他愛ない話を繰り広げる。しかし、今年は三人目がいる。昨年沈みかけた、真つ白な青年だ。記憶より髪色が金色を帯びている点は気のせいにしておく。

確か昨年、『もしそいつが来年も村にいるなら一緒に来なさい』と言った、
ような。人魚は己の気紛れな性格を自覚していたが、発言の理由が思い出せない。
一目惚れしたであろう二人を見てみたい、辺りか。曖昧な記憶を辿りつつ、
人魚は淹れられた茶を口にする。透き通った緑に近い金色から広がるのは、瑞々
しい匂い。口に含めば甘さを含む味が舌で踊る。

「うん、この味よ」

「やったねシエス！ 褒められた！」

少女は青年に満面の笑みを向けるが、青年はにこりともせず頷くだけだ。

「出来ることは……この程度だから」

「ちよつと待ちな」

二口目を飲む前に、人魚は怪訝そうに目を伏せた。

「ロザリー、あんたまさか」

問うが、少女は明後日の方向を見て、青年は小さく頷いた。

「だ、だって僕よりシエスの方が淹れるの上手だもん。こう、茶葉の気持ちを
出すのが上手っていうか」

「それは認めるけど、だからって他人に任せるんじゃないの。これはあんたの仕事なんだから、来年こそ自分で淹れること。でないとな村沈めるわよ」

嘆息混じりに言っただけで、少女はこちらを向き直し固まって、それから何度も首を縦に振った。

——それから更に一年経った訳だが、あの時自分が青年に対し『色無し』という単語を思い付いた理由がはつきりと分かった。

青年の色が、出会った時とまるで違う。金色の髪、青い目。少女と瓜二つの色。嫌な予感を胸に、人魚は三年目の茶を受け取る。記憶にあるより、色は淡い朱を帯び、香りも一際甘い。

「何かした？」

「飲んだら分かるよ。あつ、今年はちゃんと僕が淹れたんだからね！」

意気揚々と言う少女の横で、青年の表情は僅かに強ばっている。飲めば、記憶にある味に混じって花の香りが舌を覆う。

「……花？」

「うん！ 毎年同じ味だと飽きるって思ったからさ、シエスと二人で調合して

みたんだ。どう？」

成程、青年の表情は緊張から来ているのか。人魚は二人を一瞥し、珍しく頭の中で言葉を選ぶ。

「まあ、美味しいけど……出来れば普通のやつのに飲みたかったわね」

一気に、二人が意気消沈したのが見て分かる。その顔に、思わず同情した。

「いや、別にだめとは言っていないから。いつものお茶の味をちゃんと味わってから飲みたいってだけ」

「ホント？」

「本当よ」

言ってやれば、少女は胸を撫で下ろし、「それじゃあいつもの淹れてくるね」と、はにかんだ笑みを浮かべながら小屋へ向かう。次いで立ち上がる青年に、人魚は声をかける。

「あの子が大事なら縁を切ることね、色無し」

緩慢に、目を見開かせ青年は人魚を見やる。

「どうして、それを」

「惚れた相手の色に染まって、最後には命ごと相手の寿命を喰らう魔物。それがあんたの正体なんでしょ？」

茶葉の入った水のように染まり、そして同じ色を持つ者を喰らう。そのために、常の色は無い。故に色無し。百余年生きた人魚でも好きな相手を喰らう心理は分からないが、それが青年の事実。

青年は何も言わない。人魚は青年を気にすることなく続ける。

「あんたが村にいようが誰に惚れようか知ったこっちゃないけどさ、あの子がいなくなると少し不便なのよね」

儀式の継承は口伝、少女が任期を満了せず喰われると儀式が滞り面倒だ。本音を隠さず言った後は、青年の青く染まった瞳が陰るのみで、他は何の変化もない。

青年のことは嫌いではない。寧ろ、水面のように静かな佇まいは好ましい。ただ、なんとなく人魚は見たくないと思った。少女が喰われてしまい、青年が愛しいものを喰らってしまふ未来を。

四年目の春、季節に似つかわしくない暗さを帯びた少女は一人、トレーと共に手紙を持って現れた。

「シェスがいなくなった」

一言告げて、少女は常に濡れている人魚に代わって手紙を読み上げる。要約すると、これ以上村には居られないから出て行く。という内容だった。ここ数日の出来事らしい。

「行き先書いてないし急だし、茶葉の調合だって途中だったしさ……なーにが、『後はロザリー一人で出来る』だよ、それなら一緒にお茶を調合してみようなんて言い出さないで欲しかったよ馬鹿シェス」

気付けば赤く染まった少女の頬を、涙が縦に走る。

「僕、あいつが好きだったんだ」

「……そう」

やや遅れて、人魚は言った。青年は自分の言った通りに動いたようだ。しかし、泣くほど少女の心は動揺したのか。その事実には、内心軽く驚いた。

「確かに男のくせして貧相だけど、頭いいし綺麗だし、そりゃ目と髪の色が変

わったのは不思議だったけどさ。もしそれが原因だったら本当の馬鹿だよ誰も
気にしてないんだあもう言葉が滅茶苦茶だ自分で何言ってるのか分かんない

普段の勝気な姿がすっかり鳴りを潜めている。それでも、拳で乱雑に涙を拭いた少女は茶を淹れ始める。

「始めよっか」

「そうね」

カップを受け取り、一口。漸く彼女の腕は茶葉の旨味を引き出したが、何故か物足りなさを感じた。

少女と最後に過ごす年、いつも座る岩の付近に気配を感じて近付けば、そこには金色の小さな缶が置いてあった。

「これがあんたの答え？」

「大切なら離れろと言ったのは貴女だ」

問い掛けに、記憶より随分と芯のある声が返ってくる。小屋の近くにかの日

の青年が立っていた。

「強制じゃあないわよ。あんたがあの子を強く想ってたっただけ」

人魚は微笑んでみせた。青年は何か言いたげに人魚を睨んでいたが、やがて金色の缶に視線を向けた。

「それをロザリーに。中を見れば分かる」

缶のことだろうか、問おうとしたが、青年の姿はない。

程なくして少女が湖に現れ、早速岩の近くに置かれている缶を見つけた。

「なにこれ」

「知らないわよ。見れば分かるってさ」

「は？ どういう——」

缶の中を見て、少女は途中で何も言わなくなった。それから、何も言わず缶を抱き締め小屋へ向かう。開けられた缶の匂いは想像通り。

「それ、一杯目にちょうだい」

高くなった背に向かって言えば、少女は此方を振り向かず頷いた。

「——僕、村を出て働くことになったんだ」

暫くしてから少女が、トレーを横に置きながら言う。茶を淹れる腕は見違え

る程上達し、暖めたカップにそつと茶を注ぐ。

「どうしてまた？」

「前々からやっていたお茶の調合、シエスがいなくなっても辞められなくて。この間、偶然だけど街で調合をしている人と会ってさ。僕、その人の元で勉強して、一流のブレンダーになる。そしたらきつと、あいつに会える」
はつきりと言い終わった頃には、カップの中が鮮やかな紅色で満ち溢れていた。

「僕とあんたの儀式は、これが最後」

潤む青い瞳は眩しく、人魚は視線を逸らせず熱いカップを受け取る。

「結局、まともなお茶が飲めたのは去年の一回だけね」

「耳が痛いなあ」

もう一つのカップを手に取り、少女は随分と大人びた苦笑を浮かべた。

二人静かに、紅色を一口含んむ。深い茶葉の香りはきつと秋摘み、そして芳醇な花の香りが広がる。ああこれは、少女の名前と同じ名を持つ花の味。

「味の感想は？」

儀式で初めて、人魚は少女に茶の感想を問う。

「……しょっぱい」

こぼれ落ちる涙入りの茶を、少女は飲んでいた。

秘密の場所で、
また会いましょう

柗ののん

貸出票
幻想動物とお茶の事典 No. 5

氏名	返却日
吉村 裕実	済
葉山 亮一	済
三橋 祐子	済
小島 孝敏	済
柗ののん	済
葉山 亮一	済

それって
たしか本の名前だったな
315番の柗シの柗…！

気になったのは
貸出票から。
でも別の場所で
あなたのことを
知りました

終ののん

葉山さんは私のことは
知らないだろうけど
あなたがよく
知っている人の娘です

終ののん

2階エントランス
給湯申請室

秘密の場所で、
また会いましょう

椎乃 みやこ

白色の花びらが無数に落ちてきた。

清々しいほどのからつとした青空が広がっている。手を伸ばしても掴みきれない花びらが、青空で泳いでいた。日射しは柔らかい。髪を撫でる風が心地よかった。

太鼓と笛の音。陽気な旋律。雑踏の中、空を仰いで私は立っていた。白色の花びらが雪のように降り注ぎ、着飾った人たちが楽しそうに歩いていく。

パレードだ。仮装した大勢の人が私を通り過ぎて行く。どこに行くのかは知らない。どうしてここにいるんだっけ。

「みつけたっ！」

子どもに衝突された。五、六歳ぐらいの子だ。先にすれ違った子どもがいたあたり、二人で追いかけてっこをしていたのだろう。仮面から謝罪が聞こえた。騎士の仮装をした子どもは、緋色のマントが様になっていた。

「こっちだよ！」

振り返ると、先程すれ違った子どもが手を振っている。同じ騎士の仮装だ。ぶつかった子が慌てて追いかけていく。二人分の緋色のマントがゆらゆらと揺

れていた。

パレードから逆走していく姿がなぜか羨ましくて、視線を逸らした。

そういえば、かくれんぼしていたんだ。

長年過ごしてきた町から、私は去る。引越先は遠い所だ。小学校のクラスを呼んでお別れパーティーを開いた。鶏の丸焼きを頬張り、デザートを食べたあと、皆と外へ飛び出した。

近くの森でかくれんぼしようと言った。

かくれんぼは得意だ。特に、隠れる側。捜す側を待っている間に森の奥へ走った。森は広い。一緒に隠れようと誘ってくれた子とはぐれた。木々の間からあつちがいいよと指してくれた子を見失った。

気がついたら、一人で隠れる場所を探していた。みんな、どこにいったのだろう。突き進めば進むほど暗さが増してくる。巨大な樹木が立ち並び、枝葉が空を覆い、光を遮ってしまう。迷子になったら大変だ。そろそろ来た道に戻った方がいいかも知れない。振り返ったとき、見覚えのないものがあつた。

小屋が、忽然と建っていた。煉瓦が積み上げられた茶色の小屋には、緑のと

んがり帽子の屋根がある。子どもが数人入れる程度の大きさだ。

試しにコンコンとノックを試してみる。コンコンと同じ数だけ返ってきた。

「誰かいますか」

「誰かいますよ」

女性にも子どもものようにも聞こえる。

「こんなところで何をしているの」

「こんなところで何かをしているの」

窓がないので中を伺えない。扉に耳を当ててみるが、物音ひとつしなかった。

「私はかくれんぼをしているの」

「私もかくれんぼをしているの」

彼女も招待客だろうか。ふと、友達が幼い妹を連れて来たことを思い出した。

妹も混ざっていたのかも知れない。友達はどこにいるかわからない。一人で残しておくより、一緒に隠れて連れて帰ったほうがいいだろう。

「じゃあ、そこに私も混ぜて」

「じゃあ、そこに私も入れて」

幼い子どもは口まねをするのよって、友達は唇を尖らしていた。

口元が緩む。背筋を伸ばし、澄ました声をだす。

「いいよ。私が傍にいてあげる」

白色の扉を開けると、生い茂った温かな緑の香りが広がった。

扉を開けた瞬間、私は空を仰いでいた。

歓声と共にパレードは続いている。白い花びらを乗せた風が通り過ぎていく。栗色の頭についた花びらを振り払った。

夢だろうか。それなら、どこから夢になったのだろうか。あれこれ思い返してもわからなかった。

パレードの参加者は大人ばかり。子どもは先程の二人以外見かけない。背の高い大人たちはお揃いの仮面をつけ、パレードというお祭りに興じて違う「誰か」になっている。

私の顔は晒されていた。一人だけ立ち止まり、追いつかされていく。

「そこにいたんだ」

誰かに言われた。

「気づかなかった」

誰かに言われた覚えがあった。

そこに皮肉や嫌みはない。他愛のない会話の中で向けられた言葉は、密かに私を苦しめた。

「もっと自己主張したら？」

どんつと背中を押された。

パレードの外は真つ黒だ。ただの黒色ではない。ぎらぎらとしたタールに似た粘土上の液体が世界を覆っている。その空間に廃墟化したビルや家々が陽炎のように揺れていた。

陽気な旋律が嘘のよう。行列から一步でも出れば、溶けていく世界が広がっていた。

足が竦んだ。手足が痺れ、頭が、思考が崩れていく。がらがらと壊れていき、地面がどこなのか、立っている場所さえもわからなくなってしまう。

ああ、私もこうして溶けていくんだ。

早く私を見つけないければ。私という存在を見つけないと同じように溶けてしまふ。仮面でもいい。行列に連なる大人でいい。だから。

「こつち」

手を掴まれた。強い力で引き寄せられ、立ち上がっていた。

「走って」

女性にも子どものようにも聞こえる声に、聞き覚えがある。

歓声に戻った。陽気な旋律が返ってきた。パレードの中を走っていく。白色の花びらが栗色の頭に降りかかり、風に混じって温かな緑の香りがした。

ケープを纏った女の子が手を引いていた。肩まで伸びた赤毛にとんがり帽子を被り、チェック柄のスカートを履いていた。私より身長が低く、背の高い箒を引きずっている。見習い魔女の仮装だ。

彼女は参加者と一つだけ違うところがある。

「かくれんぼしていたんじゃないの？」

振り返った顔に、仮面がない。

からっとした清々しい目の色は、パレードの空に似ていた。色素の薄い肌に

はそばかすがある。

私、あなたを知っているわ。

「隠れる場所が見つからないの。その箒で空を飛んで見つけてくれない？」

「箒だけじゃ飛べないわ。「空飛ぶ軟膏」が必要よ」

ドクムギ、ヒヨス、ドクニンジン。赤と黒のケシにレタスとスベリヒユ。とっても危険な植物たちをアヘンと油で混ぜれば、「空飛ぶ軟膏」の出来上がり。

「空飛ぶ軟膏」のレシピを口にすれば、彼女が笑った気配がした。

「ふうん、覚えているんだ」

「だって、あなたが教えてくれたじゃない」

魔女は「賢い女」とも呼ばれ、薬草に秀でた存在だと彼女は教えてくれた。

秘密と危険は魅力的に映るもの。「賢い女」について書かれた本を二人で読みふけ、時にはマンドラゴラを探して泥まみれになり、笑いながら帰る日もあった。

「賢い女」に憧れた彼女は、クラスで目立っていた。しかも、「賢い女」の調合薬は危険なレシピばかり。彼女の両親はいい顔をせず、学校の先生は口を酸っ

ぱくさせて、そんな本を読むのは止めなさいと咎めた。

クラスの皆が彼女を避け始めた頃、私も少しずつ距離を空けていった。

「皆は「賢い女」を除け者にしたけれど、彼女たちは危険な薬草ばかり研究していたわけじゃないわ」

ねえと彼女は続ける。前を向く少女がどういう顔をしているのかわからない。

「お茶会をしましょう」

二人で飲んだハーブティーは、温かな緑とほのかな青りんごの香りがした。

ちらちらと降り落ちる花びらの正体を、私は知っている。

ジャーマンカモミール。あなたと初めて飲んだハーブティー。

白色の花びらに黄色の頭。青りんごの香りに似たハーブティーだ。花びらをお湯に浸して飲むなんて花を食べているようだった。彼女はその言葉が好きだと笑ってくれた。

私たちはパレードの中を走っていく。人の間を縫うように走り抜ける。

いつもどこかへ連れて行ってくれる彼女が羨ましかった。本の世界も、知らない場所も、ハーブティーも教えてくれた。私と同じ大きさの手なのに、確か

な力強さがあった。

「ごめんね」

震える声で私は謝罪をしていた。

「お茶会に行かなくて」

彼女が立ち止まる。人々は私たちを避けてパレードを続ける。

「いつまでかくれんぼしているの」

空の眼が空っぽの私を映し込んでいた。

「あなたはもう、子どもじゃないわ」

彼女の背が縮んでいた。足元を見ると私の足が彼女より大きくなっている。

視線が高くなったと気づいたとき、私は両手で顔を覆っていた。

私の体が大人になっている。

そうよ、だって、私は子どもじゃない。

大人なんだ。

子ども頃から、私はどこにでも溶け込めた。

誰とでも話せてしまう。どこのグループにも入れてしまう。それが長所だと
言われたけれど、自己主張がないだけだった。

だから、彼女に憧れた。彼女の言動は目立っていた。変わり者だと嗤う子も
いたけれど、私は自然と惹かれていた。

惹かれて憧れていたのに、私は保身を優先した。

クラスで除け者だった「賢い女」を私のパーティーに呼ばなかった。

パーティーの前日に手紙が届いた。

『お茶会をしましょう』

彼女からの招待状だった。

お茶会の会場は「秘密の場所」。

森の奥深くに大木がある。大木の根本には子どもが数人入れる程度の穴が
あった。彼女が除け者ではなかった頃、そこを「秘密の場所」と二人で名付け、
お茶会を開いていた。

『パーティーが終わってから来て欲しい』

私は、彼女の願いを無下にした。

「私のこと、怒っているでしょう」

「傷つきはしたわ」

女性とも子どもとも聞き取れる声で、懐かしいからとした声に変わっていく。耳に心地よい声も気に入っていた。

「でも、あなたはそれ以上に自分が嫌いなものね」

顔を覆っていた両手を外す。

私が大人になっても、彼女の背丈は変わらない。そばかすがついた色素の薄い肌。明るい赤毛に、晴れ渡った空の瞳。彼女は気にしていたけれど、笑ったときにでてくるえくぼが可愛かった。

記憶の中で彼女の時間は止まっている。彼女がどんな大人になったのか、私は知らない。

「わたし、あなたに憧れていたわ。わがままで周囲が見えないわたしに、あなたは付いてきてくれた。人の気持ちを自然と察して理解できる性格が羨ましかった。自分を後回しにしてしまう癖があったけれど、そういうところも好きだった」

町から出る日。彼女は会いに来てくれた。招待状を無視したのに、優しい言葉を投稿かけてくれた。恨み事をひとつも言ってくれない彼女を心の奥底で憎んでいた。

「あなたは自分がいないっていうけれど、わたしはそう思わない」

彼女の真っ直ぐな言葉は、幼い私の心を抉った。自分がどうしようもない人間だと突きつけられた。思考が溶けて、他人に合わせるための仮面さえ作れなくなっていた。

「わたし、あなたが好きよ」

どうして、そんなことを言ったの。

「それでも、あなたが自分なんていないと隠れてしまうなら」

彼女と出会った日は、収穫祭を祝う町のパレード。

「わたしがあなたを見つけられるわ」

行列から外れた私を見つけて、手を引いてくれた。

見習い魔女と一緒にパレードを駆け抜けた。

「約束よ」

感謝の言葉を告げず、私は町から去った。

温かな緑の香りがする。空を覆う木漏れ日が懐かしい記憶を呼び覚ます。

結婚前に、幼少時代を過ごした町に訪れた。十数年ぶりの故郷は様変わりしており、私を覚えている人は少なかつた。表向きは久しぶりと笑っても目は明らかに記憶を探っていた。

町は変わっても森は変わらない。変わったのは私だ。大木の穴に体は入らない。あの頃には戻れない。時間は戻らない。彼女の願いを叶えられない。

かざりと音がした。酷く懐かしい夢から醒め、大木に預けていた体を起こす。青りんごに似た白色の花の香り。赤毛は短く切り揃えられ、色素の薄い肌にそばかすはなく、代わりに化粧がされていた。見開かれた目には、あの空の色。

「栗色ちゃんだ」

彼女がつけた愛称が耳をくすぐる。

「本当に戻っていたのね。びっくりした」
可愛いえくぼはそのままで。

「結婚するって？ おめでとう」

からからとした声も変わっていない。

「ああ、もう。何か言つてよ。どんな顔をすればいいのか困るじゃない」

「……ごめんね」

「なんで謝るの」

視界が溶けていく。みつともなくぼたぼたと泣いてしまう。嫌われてもいいはずなのに、あの頃と変わらず接してくれる彼女がやっぱり羨ましくて、妬ましくて、愛しくて。

「またかくれんぼしていたの？」

腰を屈め、意地の悪い笑顔を見せた。私は首を振ってから震える唇を開いた。

「あなたは私の憧れだった。大好きだった。でも、当時の私はあなたを助ける勇気なんてなかった。保身を優先させたの。ごめんなさい。パーティーに呼ばなくて、お茶会にも行かなくて」

私は無力で意気地なしの癖、少女時代には戻れないほど大人になってしまった。

パレードの中を駆け回ることは、もうできない。

それでも、彼女は記憶の底にいた。

「……お茶会、今頃じゃだめかな」

止まっていた時間を動かすことが許されるのなら、あなたと約束の場所でまた笑い合いたい。

今度は憧れの人ではなく、友人として。

「栗色ちゃんの自己主張、初めて聞いたわ」

みつともなく涙でぐしゃぐしゃになった顔を上げる。

「大遅刻ね。でも、いいわ。隠れている栗色ちゃんを見つけられたもの」

「秘密の場所」で、もう一度カモミールティーはいかが。

それが愛すべき彼女の、最愛の答えだった。

10/5 13:00 に
談話室で
待ってます
だめなら
別の日でも

葉山

貸出票

秘密の場所、
また会いましょう

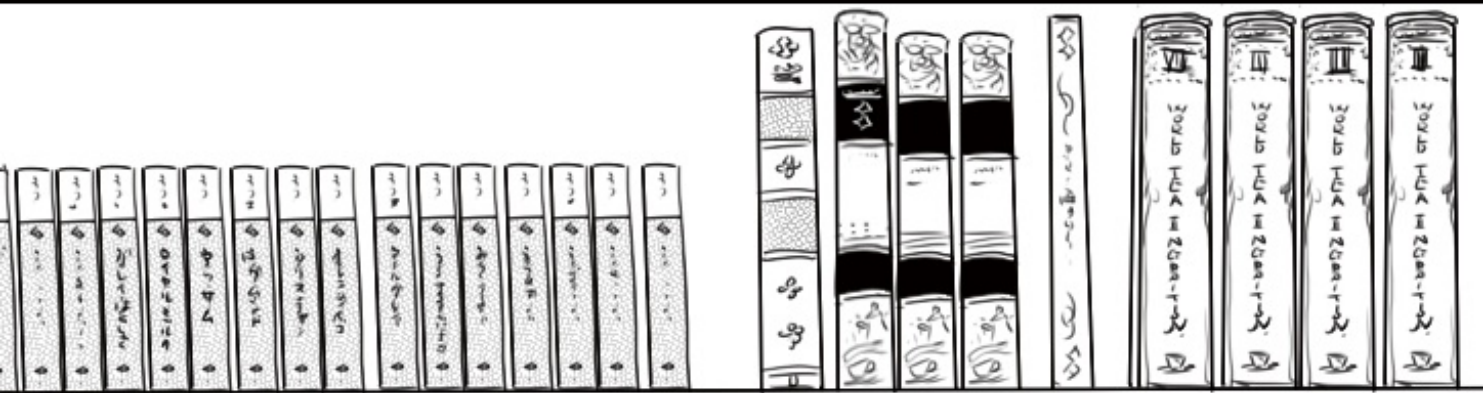
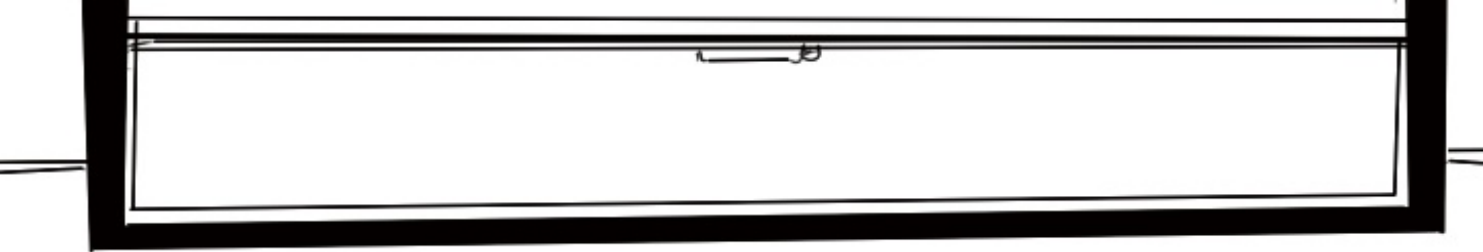
No. 2

氏名	返却日
野村 理恵子	済
藤井 倉美	済
相沢 知美	済
葉山 亮一	済
尾崎 辰己	済
石井 松代	済
終ののん	済

レポート
がんばって
ください

わたしの
おすすめのお話と
お茶持って待って
ます

終 ののん







チャノハよ帰れ


野原へ帰れ

とあるのどかな田舎町。
ここには年に一度、庭先で
茶器を割り新調するという、
小さなお祭りがあります…。



チャノハばらいの祭り

T&DANE



ママ、なんで
カップを割るの？

お祭りだからよ。

チャノハっていう妖精を
音で追い払うの。あれは
茶葉にイタズラするから。



フーン…。

チャノハは悪い
やつだなあ！

……いいえ。



人々は知っています。
チャノハは人間が大好きな
優しい生き物だってこと。



キユツ！

その昔、一匹のチャノハと少年が
友達になりました。

。チャノハのしっぽを摘んだ茶は
大変美味で、高値がつきました。

評判はあっという間に広がり、
やがてチャノハ達はどんどん
摘み取られ…

多くが死んでしまいました。

これを後悔した少年は、

チャノハよ帰れ
野原へ帰れ

ティーカップを割り、
チャノハを人から遠ざけたのです。

…でも、チャノハ達も知っています。



人間も本当は、
チャノハを大好きだってこと。




おしまい



談話室にいたのは
ひとりだけ
知的な瞳の少女
彼女は照れてみせたあと
甘いお茶の香りを
漂わせて

はじめまして、と言った



君、いくつ…？小学生…？
この香り、甘茶かな
ん、なんだっけそれ、そんな話あつ
ただろ。「鼠の…」
それぞれ。本読むの、好きなの？え？
研究室の……教授のお嬢さん？

鼠の福音

綿子

空のペットボトルを鷲掴みにした私は、制服のまま家を飛び出した。

差し迫った時間に急かされて、田舎の田んぼ道を全力疾走する。

もし私が昔のように純粹で素直な子だったら、ここで神さま仏さま！と祈っただろう。だけど私は知っている、この世には神も仏もないことを。第一志望の高校受験の日に高熱を出して、私はそれを思い知った。だから願掛けはしない。ひたすら走るだけだ。

そんな調子で走り続けて、道を曲がって。

林道に入ったところで子ども姿が見えた。小学校、低学年くらいかな。後ろ姿だけだからはつきりしないけど、うちの近所では見たことがない。

もったも、もう三年も前に登校班を脱退したので、低学年生の顔なんて知らなくて当たり前なんだけど。

その子は私と同じ方向に向かっていた。

この道の先にあるのは村一円を檀家として抱えているお寺さんだけだ。とい

うことは、あの子と私の目的は、たぶん同じ。花祭りと甘茶。

そういえば私もあのくらいの頃から一人でお寺に出かけてたつけ――。

なんて物思いにふけっていると、子どもがぼてつと、ちよつと間抜けな感じで転んだ。

「大丈夫!？」

慌てて駆け寄って声をかけた。

男の子だけど髪が長くて、両耳の辺りで瓢箪のように纏めて、妙な髪型をしている子だなあと思ってたんだけど。顔を見て、それどころではなくなった。

さくらんぼのような唇に、うるうるの大きな瞳。しかも上目遣い。

私の胸は、ずつきゅーんと撃ち抜かれた。

なにこの子、可愛い！

――と。

「ふ、えええええん!!」

顔を見るなり泣きだされて、私は更に慌てふためいた。

幸い男の子はすぐに泣きやんでくれた。

目的地が同じなので、一緒に歩き始める。

一分一秒も惜しいけど、さすがに小さな子どもを置いて先に行っちゃうほど鬼でもない。ましてやこんな可愛い子、一人でいたら悪い人に連れ去られちゃうかもしれないし！

「大丈夫？」

「はい……ありがとうございます、お姉さん」

ちよつとだけ無理しているような小さな微笑みを向けられて、私は良い人の仮面の下で悶えまくる。可愛いよ！ きゅん死しそう！

「ねえ、キミも花祭りに行くんだよね？」

「はい。お姉さんもですか？」

男の子の視線が私の空のペットボトルに向いた。そういえばこの子、何も持っていない。甘茶を貰いに行くんだよね？

「君は何か持って来なかったの？ 水筒とか」

すると男の子はちよつと俯いて、恥ずかしそうに頬を赤らめながら、

「忘れてしまったんです」

と、小さな声で呟いた。

ねえいい加減、お姉さんと結婚しようか。

「じゃあこれ使う？」

「ええ？ でもお姉さんは——」

「私は甘茶はいいの。……そっちが本命じゃないっていうか……」

気まずさから視線を逸らした。

それからすぐに目的のお寺さんが見えてきた。立派な門扉の横には「灌仏会」と書かれた立て看板が置かれている。なんて読むのかは分からない。ずいぶん前に教えてもらったけど、難しくてすぐに忘れてしまった。

お釈迦様の誕生日を祝うお祭りのことで、通称は「花祭り」。そう言えば通じるから十分だ。

本堂に向かうと独特の、甘くて鼻がすうっと通るような匂いが漂っていて、お線香の香りを上書きしていた。

部屋の奥にはご本尊。

でも今日の主役はそちらではなく、花祭りのために用意された花御堂だ。小さな御神輿のようなものが沢山の花で飾られていて、中に丸い桶が用意されている。桶の中は甘い香りを放つお茶で満たされていて、その中央にはお釈迦さまが立っていた。

そして花御堂の傍には、学生服のお兄さん。

心拍数が一気に跳ね上がった。

「こっ、こんにちは先輩！」

「こんにちは、今年も来てくれてありがとう」

どもる私とは対照に、先輩は自然にっこり笑う。それから私の制服に目を止めて、驚いたような顔をした。

「付属、受かったんだ？」

「あ、はい。今日が入学式だったんです」

「すごいね、あそこ偏差値けっこう高くなかった？」

「先輩の開城ほどじゃないですよ」

「どうだろ、実際入ってみるとうちはそんなに凄くないよ。校則が緩いからみ

んな好き勝手にやってるし」

それぞれの高校をテーマに他愛のないやりとりをしながらも、私は開城高校を第一志望にしていたことは絶対に言わなかった。合格したら言うつもりだった。熱がなければ受かっていた。可愛いと評判の付属高校の制服なんてどうでもいい。

先輩と一緒に高校が良かった。

だから今日の入学式は最悪の気分だったけど、その鬱屈さは先輩と話しているうちに少しずつ解けていった。

先輩がいない高校生活はつまらない想像しか浮かばないけど、それでも時々、こうやって何かの折に話でも出来れば、きつと三年間我慢出来る――。

興奮の火照りで頬つぺたが溶け落ちてしまいそうな時間は、先輩の背後から現れた人影に遮られてしまった。

誰だろう、知らない人、きれいな人だ。開城高校の制服を着ている。艶々のロングの髪が、少し屈んだ拍子に肩に触れて、細かな砂のようにはらり、と落ちた。ほんのり赤い唇が、ごくごく自然に先輩の名前を呼び捨てにした。

「カズヤ、お兄さんが呼んでるよ」

「分かった。——ごめん、ちよつと行ってくる」

後半を私に向けて、先輩が立ち上がる。

私は思わず呼び止めていた。

「先輩、もしかして……」

「カノジョ」

にかつと笑った先輩の顔が忘れられない。

気がついたら私は林道を歩いていた。来た道をそのまま戻っている。ペットボトルは空のまままだ。

「お姉さん……」

か細い呼びかけを聞いて、はっと我に返った。傍らを見下ろすと、そこには私を心配そうに見上げる男の子がいたので、頑張つて笑った。

「ごめんね……。良かったらうちでジュースでも飲まない？」

貰い損ねた甘茶の代わりに、私は男の子をうちに招いて冷蔵庫の一面を占め

ていた乳酸飲料を提供した。

キッチンなんて呼ぶのもおこがましい、狭い台所に、無理に入れられた食卓に向かい合わせになって座る。

男の子は甘茶について何も言わず、私の気落ちについても何も聞かず、ただコップに手を伸ばしていただきます、と言った。

——いただきます。

物心がつく前から叩きこまれた習慣の意味を覚えてくれたのは先輩だった。

中学一年の夏、家族でお寺に行ったけど、法要なんてつまらなくて、庭で適当に遊んでいた私に、お膳の用意が出来たからと呼びに来てくれたのが先輩だった。

お堂に戻るまでに、先輩がいただきますの意味を教えてくださいましたけど……。

その時の先輩の目はすごくきらきらしてて、きれいで、熱っぽくて、どこか

子どもつぼくて——。以来、先輩は「二つ年上の同じ中学の男の子」から「二つ年上の同じ中学の異性」になった。

「……っ、ひいつく……」

情けない嗚咽がこぼれて、テーブルの上にぼたぼたと涙が滴り落ちた。

神も仏もいやしない。

いたらきつと、大事な受験の日に熱なんて出さなかっただろう。どうしても熱を出さなきゃいけない運命だったなら、せめて一日くらいずらしてくれたはずだ。

三年間の片思いを、手助けしてくれたはず。

だからやつぱり——神さまも仏さまも、いやしない。

「求めよ、されば与えられん」

澆刺とした声は男の子のものだった。

こんな時に何を言い出すんだろう。涙を拭うのも忘れて顔をあげると、男の

子はとても穏やかな表情をしていた。まるでお寺の庭の池みたいに静かだ。それが私の目をとらえると、にっこりと笑顔になる。私がさんざん可愛い可愛いと持て囃していた極上の笑顔だった。

「お姉さんは、例えば僕が、これと同じものをもう一杯下さいと言ったら、僕に与えてくれますか？」

「……？ 別にいいけど」

とはいえ、コップの中の乳酸飲料はほとんど減っていない。

この子、何が言いたいのか？

「じゃあ僕が、そのこの包丁を貸して下さいと言ったら、お姉さんは僕に与えてくれますか？」

「なに言ってるの！ だめだよ、危ないでしょ！」

「つまりそういうことです」

「え？」

「物事の良い、悪い、という判断は人間でも出来ません。神さまや仏さまなら尚更です。諸法無我、すべては移り変わるものですから、いつかお姉さんの所に

も、さっきのお兄さんみたいな人が現れます」

澄み切った瞳でそう断言されて、私は目を瞬かせた。まさか私よりもずっと年下の男の子に諭されるなんて。私、そんなに酷い泣き方したかな？ びっくりし過ぎたせいで涙が引っ込んでしまう。

男の子の言いたいことは分かる。けど、納得は出来ない。失恋の痛手を負わされたこっちの身にもなつてよ。

「……私は先輩がいいんだけど」口を尖らせる。でも男の子が私を慰めてくれようとしたことは、純粹に嬉しかった。「でも、ありがとう」

「ところでお姉さん、このアムリタを頂いても構いませんか？ これなら甘茶ではなくても、マハーカラ様もお気に召して下さると思います」

そう言つて男の子が示したのは、コップに入った乳酸飲料だった。アムリタ？ というのが何を意味するのかわからないけど、必要だと言うなら別に構わない。どうせお歳暮の余り物だし、なんなら一瓶丸ごと提供したつていい。

「いいよ」

でも、まはー？ それ誰、と続けようとして。

ほんの一度のまばたきの間に、男の子は消えた。

「え……………えええええ!!」

男の子が座っていたイスは誰かが座っているようにほんの少しの隙間があつて——でも誰も座っていなかった。

コップもない。

もちろん、中身のジュースもだ。

そんなバカなと、動転しながら台所を飛び出すと玄関まで走った。そこには男の子が脱いだはずの靴が——なかった。

サンダルをひっかけて表に出る。軽トラックが停まっているそこは庭兼駐車場のうちの敷地で、いつも通りの様子で、どこにも異常はなかった。

一つを除いて。

敷地を区切る垣根の向こうから来訪者が現れたのだ。どこのご近所さんかと思つたらお寺さんの長男さんだった。先輩のひとつ上のお兄さんだ。

「あ…………どうも」

動転しっぱなしの私は、挨拶もそこそこに頭を下げる。先輩とは年齢が近いこともあって声をかけたりかけられたりしていたけど、こっちのお兄さんとはあまり話をしたことがない。愛想の良い先輩と違ってお兄さんの方は少し無口だ。それが苦手だった。

「あの……うちになにか？」

「さつきうちに来てたよね」そう言って彼は手に持っていた水筒を私に手渡した。「忘れ物」

思わず受け取って、少し考える。私、何か忘れたっけ？

続けざまに驚くことばかりで、混乱したまま水筒のコップを開けると、ふわりと甘い香りが洩れてきた。

甘茶の香り。貰い損ねた、年に一度のお楽しみ。

「あ、」届けてくれたんだ、わざわざ。

ありがとうございます、と続けようとしたけど、お兄さんの背中はまだ見えなくなってしまうていた。

傾き始めた太陽に照らされて、私の影が長く伸びる。

いろいろな出来事がいつぺんに押し寄せてきて、私はまだなんとなく現実に帰還出来ずにいた。失恋の痛手も、今はぼんやりと輪郭を失っている。

ただ甘茶の香りがとても優しく、花に誘われる蜜蜂みたいに一口だけ飲んだ。

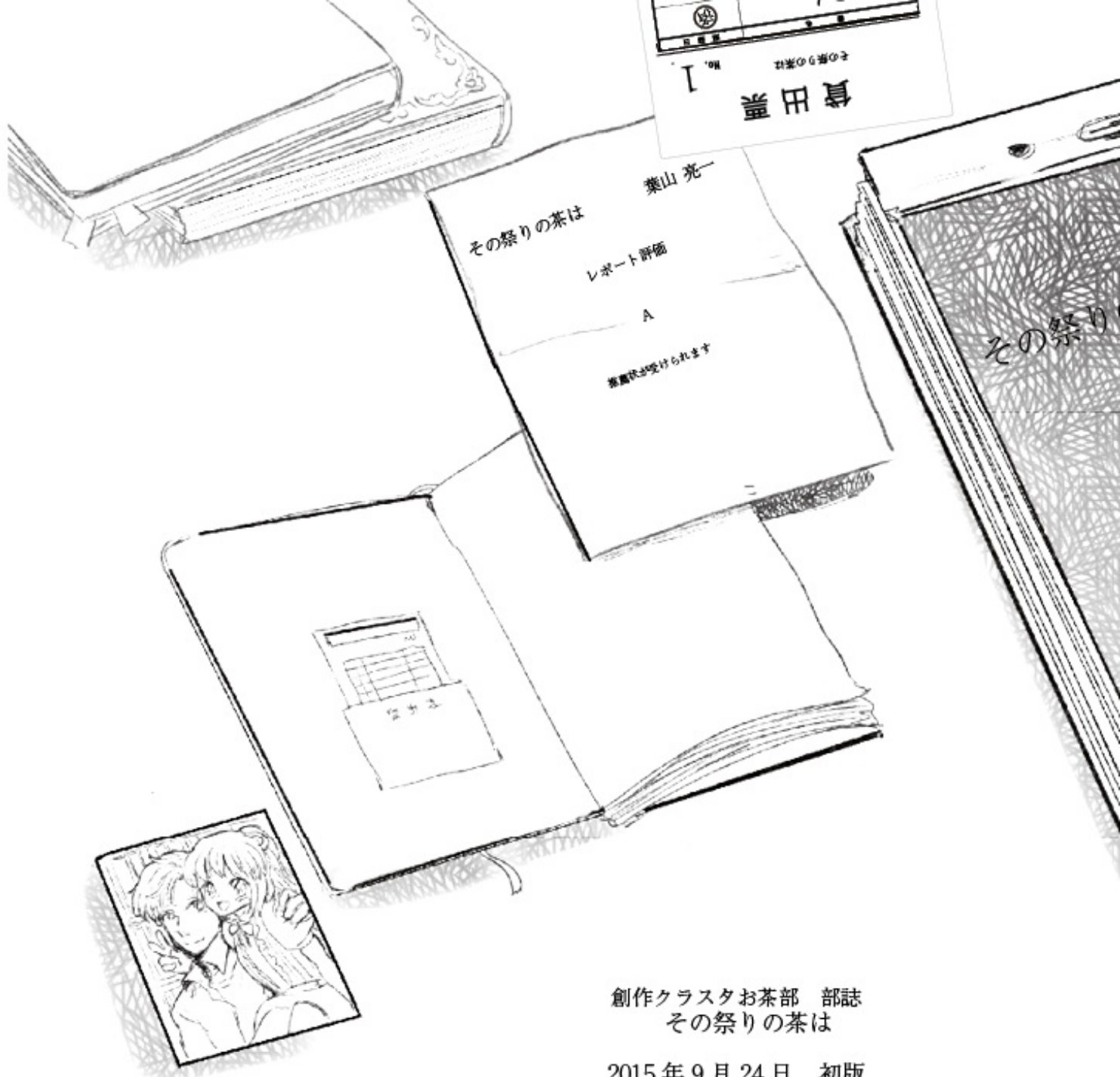
「……甘い」

さっきのお兄さん、カッコ良かったな。——なんて考えてしまったので、ぶんぶん頭を振る。

現実に帰って来た私は、甘茶と、花の匂いがする空気をいっぱい吸い込んだ。

お寺のある方角から、鶯の鳴き声がする。

水筒、返しに行かなきゃ。



創作クラスタお茶部 部誌
その祭りの茶は

2015年9月24日 初版

創作クラスタお茶部
<https://twitter.com/twiocha>

発行・編集・DTP 椎名恵 @47kei
表紙 るる枝
扉キャラクターデザイン ゆきま

本書の転載・転用・金銭発生する利用の一切を禁止します
個人が楽しむ範囲での複製はご自由にどうぞ。